

NOCHS レクチャーシリーズ

なにわ・大阪の神社

2005年9月24日

真野修三

関西を考える会の活動と「大阪の寺社」

近江晴子

大坂三郷の氏神さんと夏祭り

内田吉哉

大阪の夏祭り調査報告



Kansai University Research Center for
Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies
Occasional Paper **No. 1**

NOCHSレクチャーシリーズ

なにわ・大阪の神社

2005年9月24日

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

ご あ い さ つ

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターが本年4月に発足しました。本小冊子は、本センター第1回NOCHSレクチャーシリーズ「なにわ・大阪の神社」（2005年9月24日、関西大学尚文館502教室）において講演された内容を収録したものです。第1回NOCHSレクチャーシリーズは、大阪の文化遺産を形成・保持するうえで中核的存在を果たしてきた寺社のうち、特に神社についての講演会をもちました。

講師の真野修三氏は、明治安田生命「関西を考える会」の代表として、企業の立場からの地域貢献をはかるため、関西の歴史や文化を新たな視座でとらえようとしておられます。明治安田生命「関西を考える会」は、2005年の活動テーマに「関西と寺社」を掲げています。真野氏は、寺社を単に歴史的遺物としてのみとらえるのではなく、現代とのつながりを絶えず意識しながら、「これからの寺社とのかかわり方」をさぐる道を示唆されました。

ついで講師の近江晴子氏は、大阪天満宮文化研究所の연구원として長らく大阪天満宮史の編纂に携わってこられた方です。大阪天満宮は大坂三郷の中で唯一、戦災を免れた神社であり、18世紀前半から現代にいたるまで連綿と営まれてきた大阪書林御文庫講に代表されるように、大阪の文化遺産の集積地として重要な役割を担ってきました。近江氏には、大坂三郷の氏神とその祭礼について講演していただきました。

また、両氏の講演とあわせて、当センター祭礼遺産研究プロジェクトの活動として、R A内田吉哉が大阪の夏祭りに関する調査報告をおこないました。

本冊子およびNOCHSレクチャーシリーズが、大阪の文化力の向上、地域活性化の一助となれば幸いです。

2005年12月

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
センター長 高橋隆博

NOCHSレクチャーシリーズ
なにわ・大阪の神社

目次

ごあいさつ	
真野修三 関西を考える会の活動と「大阪の寺社」	5
近江晴子 大坂三郷の氏神さんと夏祭り	14
内田吉哉 大阪の夏祭り調査報告	26
編集後記	

関西を考える会の活動と「大阪の寺社」 真野修三

1. 関西を考える会活動の30年と

これまでのテーマ

「関西を考える会」の活動は今年でちょうど30年を迎えました。これまでのテーマについては表1に示したとおりです（表1）。

明治安田生命は2004年1月に明治生命と安田生命が一緒になってできた会社ですが、当会は、旧明治生命が1976年、ちょうど創業95周年を迎えたときに、大阪に勤務する有志が、何か地域に貢献できる活動をしようじゃないかとはじまったのが、そもそもの活動の最初です。

第1回はパネル展を開催するという事に決まり、テーマは「大阪とゆかりの深い明治生命」となりました。テーマには明治生命と謳っていますが、内容的には大阪北浜の「適塾」が中心となっています。なぜ適塾かといいますと、明治生命の社祖、創業者の阿部泰蔵が福沢諭吉の開いた慶応義塾の出でした。

慶応大学といえば福沢諭吉、福沢諭吉といえば適塾、ということで、会社の95周年を期に、大阪と適塾について遡り、決して浅くはない明治生命と大阪との縁を見直そうということとなりました。そのときは4枚のパネルを淀屋橋の明治生命ビルのロビーに掲示しました。

ちょっと話はそれますが、近江晴子先生のレジュメの地図を見ていると、ほう、載っているじゃないか、と思わずニンマリしました。地図のなかに明治生命保険会社という小さな文字がありますが、その場所が1976年にパネル展を最初に開催した場所です。ですから、明治生命は東京の会社ではありますけれども、明治の時代から、ここに支店を構えて古くから大阪で活動をしていた会社ということです。

以降、毎年、毎回、テーマを掲げて活動してきましたが、最初の頃（1977～83年）は、ずっと「関西復権」を大きなテーマに取り上げていました。この背景には、東京に比べ、当時地盤沈下しつつある大阪をなんとかすべく、力強い復権運動を行いたいという担当者の強い思い入れがあったので

すが、結果的に、大きな花を咲かせることなく、復権活動は尻すぼみとなり、それからは主として文化や歴史に関するテーマに取り組むようになりました。

当会の主たる活動は、テーマに沿って冊子をつくることですが、冊子は、関西に縁のある識者、約100名にご意見をいただく形をとっています。30年の活動の中で一番人気があったのは、「野球」と聞いています。野球は1993年、1998年の2回、テーマとして取り扱っています。後日談ではありますが、今年も野球をテーマに取り組んで、来年それを冊子にしたら大きく盛り上がったのではないかという気がするのが、ちょっと残念に思われます。

1986年と1987年には「関西商法」というテーマに取り組みました。バブルが真っ盛りな時代でした。そこで最近はあまり言われませんが、「関西商法」というものを見直そうという中で取り上げたものです。

このときの内容は、1987年に学生社から『ザ・関西商法』として単行本になり、好評を博したと聞いております。今もたまに、関西商法の本はありませんか、と問い合わせを頂戴することがあります。よく、関西商法、とはいわれますが、専門書もなく、なかなかまとまった本もないとのこと、現在も大学の教科書として用いられることがあると聞いたことがあります。

それから、関西、とくに大阪は「食い倒れ」ということで、飲食をテーマに1989年、1990年、1994年、2000年の4回取り上げています。2000年は「水」がテーマですので、必ずしも飲食ではないのですが、お酒などについて一部触れています。

また、関西というと「お笑い」ですが、このテーマでは1995年に一度取り上げています。資料としてお渡しした日経新聞の記事のなかでは、来年のテーマはお笑いではないかと言われてしまっていますが、残念ながら準備ができておりませんので、来年はお笑いではありません。しかし近々、お笑いについても考えたいと思っています。

2004年、すなわち去年ですが、「始まりは関西」ということで、これはみなさんのお手元に冊子をお届けしましたが⁽¹⁾、それまでの文化や歴史をテーマとしたものと一風変わって、関西生まれの

年	回	テーマ
1976	昭和51	1 大阪とゆかりの深い明治生命—適塾を中心に— (パネル展)
1977	52	2 見直そう！大阪の良さを (パネル展)
1978	53	3 急げ！関西復権 リフレッシュ大阪 (パネル展)
1979	54	4 奏でよう！関西復権シンフォニー
1980	55	5 //
1981	56	6 関西復権—ふるさと100人熱いメッセージ
1982	57	7 関西復権—生きがいのあるふるさとを未来へおくろう
1983	58	8 関西復権—21世紀の生きがい・ふるさと・世界の関西
1984	59	9 関西のこころと文化を考える—「関西」「近畿」「関西復権」の言葉をとおして
1985	60	10 女性をとおして関西を考える
1986	61	11 いま関西商法を考える
1987	62	12 「関西商法」から「関西経営法」の確立へ
1988	63	13 演歌にみる関西のこころ
1989	平成1	14 味—関西と食文化
1990	2	15 味のシンフォニー
1991	3	16 ロマン脈々—関西の旅考
1992	4	17 やまとごころに遊ぶ—百人一首と関西
1993	5	18 野球大好き関西人
1994	6	19 酔えば楽しき—関西酒文化を探る
1995	7	20 上方・笑いのシンフォニー
1996	8	21 個性颯爽—おしゃれチック関西
1997	9	22 しなやかに、したたかに—関西女性考
1998	10	23 勝っても負けてもお祭りや—阪神タイガース考
1999	11	24 伝統とモダン—関西の街文化考
2000	12	25 水との物語—関西の水文化考
2001	13	26 関西の祭百景—関西の祭り文化考
2002	14	27 関西の山風土記—山をとおしてみる関西の歴史と文化
2003	15	28 関西の池紀行—池が映す歴史と文化
2004	16	29 始まりは関西—進取の精神と風土を探る
2005	17	30 関西と寺社—寺社を通じてみる関西

表1：関西を考える会30年のテーマ

商品やサービスを探る中から、独創性や創造性に富む、関西人の精神気質や風土を探る試みを行ってみました。

そして、そんなテーマをとりあげた縁から、産経新聞で「始まりはいつも関西」というコラムを去年の11月から木曜日の関西版夕刊に連載させていただいております。

このコラムは9月末ですでに40回連載されています。最初は、ネタ切れの不安を常に持ちながら書いていたのですが、いろいろと調べていきますと、さすが関西、無尽蔵に新しいものが、次から次に、大きなものから細かいものまで出てきます。

しかし、大きなものをあえて取り上げるのはつまらない。たとえば「カップラーメン」「ボンカレー」「シャープペン」などを取り上げても、皆さんよく知っているので面白くない。そうでないものにもいろいろ面白いものがあるよ、ということで、紹介を続け40回を迎えたということです。一部には、私の不安とは裏腹に、いつネタが切れるのかと期待されているようですが、まだしばらくはネタが続くような状況ですので、産経新聞社さんから、もういいよといわれるまで、書き続けようという次第です。

関西を考える会の活動の成果は、主としてテーマに沿った冊子の作成になるのですが、本来の意義は、関西になじみの深いテーマ、水だとか山だとかについて識者に語ってもらい、それを市民の皆さまに伝えることで、それを機に関西についていろいろお考えいただくことにあります。

例えば、今回冊子のテーマとした寺社については、最近でいいますと、作家の五木寛之氏が『百寺巡礼』という本を出されて、関西も含めていろんなお寺を紹介されております。それ自体を否定するつもりはもちろんありませんし、これまでいろいろな方がいろんな形で寺社の話をされています。では、本を書くような有名な人だけが寺社を考えているかというと、決してそういうわけではありません。例えば、関西を考える会の識者の方、井上宏氏（関西大学名誉教授）にしても、関屋俊彦氏（関西大学文学部教授）にしても、河上邦彦

氏（神戸山手大学教授）にしても、研究分野は違いますが、それぞれ寺社に対する思いがあり、それだけではなく、かつてテーマとしてとりあげましたが、山や池や川に対する思いも持っていたりします。また、当然、普通の市民の方々にもそういう思いはあるはず。それを結びつける活動をしたということなのです。しかし、とは言っても、そんな識者の方々の話を聞く機会が、市民の方々にはなかなかないだろうという実態があります。

五木寛之氏の話であれば、著書はもとより、テレビ、講演会で聞く機会はあると思いますが、大阪歴史博物館副館長の相蘇氏の寺社に対する思いだとか、あるいは井上宏氏の寺社に対する思いというものは、おそらくどこに行っても聞く機会がない。本人も公式の場でそういう話をすることはありません。そう考えると、この冊子は貴重な機会の場としてあるのではないかというように思っています。

そうした前提で冊子を見ていただくと非常に面白いと思います。例えば、大阪府立大学教授の堀江珠喜氏。堀江氏は最近、『人妻の研究』（ちくま新書）という非常に刺激的なタイトルで研究成果を発表されました。堀江氏は神戸女学院大学のご出身です。その堀江氏からどんな寺社を紹介していただけるかと思ったら、神戸女学院大学の中の小さな神社の紹介をされています。また、神戸女学院大学はキリスト教の学校なのに、十三参りに行きご利益があったという話などをされています。そういう話は、どこの本にも、どこのエッセイにも出てこないだろうということです。

エッセイストの妹尾貴美氏は京都の伏見稲荷にお参りされていましたが、毎年、霊気を感じながら帰ってくるというような話をされています。妹尾氏もおそらくこの冊子の場でだけ話されるのではないかと私は考えています。

ということで、会の活動については、ひとつは冊子の編集、発行、そして先ほど述べたパネル展の開催ですが、パネル展は、残念ですが、しばらく休止の予定ですので、冊子の発行が中心になり

(1) 明治安田生命保険相互会社大阪総務部 関西を考える会『ふるさと関西を考えるキャンペーン29年 始まりは関西 進取の精神と風土を探る—識者1100人の意見と意識を中心に—』平成16年6月

(2) 明治安田生命保険相互会社大阪総務部 関西を考える会『ふるさと関西を考えるキャンペーン30年 関西と寺社 寺社を通じてみる関西—識者・市民1800人の意見と意識を中心に—』平成17年6月

ます。そして、請われれば、こういった会でお話をすることもあります。ときには、産経新聞社にて現在書いておりますが、執筆活動もおこないます。

その他では、識者の一人に大阪に大蓮寺應典院のご住職で秋田光彦氏という方がいらっしゃいます。秋田光彦氏は映画界では知られた方で、昔よく映画を作っておられました。今回その秋田氏が作った原案を元に、日本アカデミー賞の作品賞を受賞した佐々部監督の「カーテンコール」という映画が11月に公開されることになっており、その試写会の開催の手伝いをしたりしています。

2. 2005年度テーマである「寺社」を 考えるにあたって

以上が関西を考える会の活動の30年のあらましですが、それでは、2005年のテーマである、寺社について若干お話をさせていただきたいと思えます。

まず確認といえますか、基本的なスタンスを合わせる意味で、統計的な話をします。

全国に寺社は約16万あります。そのうち関西には約2万5千あります。47都道府県で考えると相当な割合ですので、言うまでもなく、関西には寺社が多いということが言えます。

では、寺院が一番多い都道府県とはどこかと聞かれれば、一般的には京都か奈良ではないでしょうか。ところが、都道府県別に見ると、一番多いのは愛知県です。二番が大阪府、三番が京都府。これが、寺院が多い都道府県のベスト3です。

愛知県でなぜ多いかという、昔から愛知県東部の三河地方で一向宗が非常に盛んだったというようなことが背景のひとつにあげられています。

京都府より大阪府の方が寺院の数が多いことはあまり知られていないことだと思いますが、その意味で、大阪は寺の町といっているかと思えます。ただし、これはあくまでも「大阪府」の話ですから、京都市と大阪市との人口密度を勘案すると、やはり京都市のほうが多いのではないかと考えられます。

同じく統計から比べますと、特徴的なのは神社の数です。神社が一番多いところについては、私もあっと驚いたのですが、新潟県です。新潟県が

一番多く、4,791、二番目が兵庫県で3,858、三番目が福岡県で3,119です。

数値は、とり方によって多少違うと思いますし、紹介したのは平成15年の『宗教年鑑』(文化庁)ですので、平成16年版では多少は違っているかもしれませんが、傾向的にはこのような状況です。

では、神社が少ないところはどこかという、一般的には沖縄県だと思います。確かに沖縄県が一番少なく13、二番目は和歌山県で440、三番目が宮崎県で676です。四番目が、実は大阪府です。大阪府の神社の数は725、先ほど寺院が全国で二番目に多く3,483であると申しましたが、それと比べて神社の数が少ないというのは、町として考えれば、非常に驚異的ですからあります。その理由は、私は専門家ではないのでわかりませんが、実態として上がっているのがこういう数値です。

大阪府に神社が少ないという理由については、明治の末に合祀されたのが理由であるという説もあります。小規模な神社が大きな神社に統合されていったということです。それも理由のひとつでしょうが、それにしてもこの差が出てくるのはなぜなのだろう。いろいろ問題として出てくるかと思えます。

私は、統計的な観点から、関西のこうした寺院、神社の状況を見て、関西の人は、関東や他の地域の人から見ると、若干違うところがあるのではないかと思います。

関西では、生活のさまざまな側面に寺社が入り込んでいます。祭礼や日常的な年中行事として寺社が入り込んでいます。

それだけでなく、名も知れぬ寺社に小1時間立っているだけで、関西ではどこの寺社でも何人も人が来てお参りをしている光景を見かけます。こういうことは、関東や他の地域ではなかなかお目にかかれません。それだけ、関西では、神頼みすることが多いのかもしれませんが、他の地域の方々は、神頼みをするにあたって、特に神社仏閣でなくてもいいのかもしれませんが。

そして先ほども述べたように、さまざまなお祭りや、さまざまな行事があります。関西に特徴的なものとして、地蔵盆や十三参りなどがあります。こういった年中行事のなか、関東やその他の地域と違った寺社とのかかわりの中でひとつとは生活

しているといえます。関西に普段から居住しているとなかなか気がつきませんが、それはどういったことなのだろうか。これらが、今年、テーマとして、関西と寺社を取り上げるに至った基本的な思いです。

それでは、冊子『関西と寺社』の概要をご説明しますが、その前に少しだけ編集の裏話を披露させていただきます。先ほど申しましたように、当方の狙いは、識者の方の意見を通じて、関西の人々と寺社との関係を浮き彫りにするという点ですが、識者の皆さまからいったいどういった寺社が上がってくるのかという楽しみがありました。

ただ、その楽しみの半面、編集には大変苦勞をしました。何を苦勞したかと申しますと、事実の確認にもものすごく苦勞をしました。冊子をご覧になれば、「ここは違う」という箇所が見つかると思います。冊子でとりあげた寺社の数は250で、そのうち170ぐらゐは実際に行き確認を行い、万全を期したつもりだったのですが、間違えたものがけっこうありました。

間違えた責任は、書いた識者にある、ということにしてしまえばそれまでですが、そういうわけにもいきません。なにしろ識者の方にはボランティアで参加してもらい、ろくに報酬を支払っていないからです。報酬をお支払いしていないなかで、これだけのことを書いてもらって、かつ、確認したところ、間違えていましたよ、というわけにはいきません。ということで、ひとつひとつ、知っているところ、知らないところについて文献で調べ、事実確認をするためにあちこちとまわりました。

中にはあいまいな記憶によって執筆された原稿もあり、全文書き直したようなところもあります。また、千手観音と十一面観音を間違えているというようなことも日常茶飯事のこととしてあります。それは記憶のことですので、致し方ありません。祭りの時期を間違えている原稿もありました。編集者が先入観にとらわれていた場合もあります。これについては厳しくお叱りを頂戴いたしました。全部回収して、訂正してやり直せといわれましたが、平謝りして、お許しください、ということで何とかご了解いただきました。他にも小さ

な誤りは結構あり、中には写真が違っているところもあります。某寺と書いてあるのに、実は某寺ではなかったという例もあります。

読者の方にいただいたアンケートでは、住所が入っていない。写真をカラーにしろ。歴史や由緒についてもっと詳しく記述しろ。あの寺社がないのはおかしい。そういったご意見も頂戴しました。確かに、読者の方のご要望はごもっともですが、私どもの活動の趣旨を考えますと、なかなかそこまではできないところがあります。

まず、住所を入れることについて。確かに住所を入れることは親切かもしれませんが。実際、私自身170か所の寺社へ行ったこともあり、住所は全部わかっています。しかし、住所や地図を入れることで、他の市販のガイドブックにバッティングすることになってしまいます。当方の冊子は、無償でご提供していますので競合することが本意ではありません。

次に、写真をカラーにすることへの要望は、は予算の関係で実現できません。歴史や由緒について解説を入れてほしいという要望に関しても、入れることは簡単ですが、問題点としてはその事実確認が大変になるということと、そして、やはり同種のガイドブックが山ほどあるということです。ですから、それらは、他の本で探すのも楽しみのひとつであろうと、アンケートを書いてもらった方々にはそういうことをお書きしてお返事を差し上げています。

3. 冊子『関西と寺社』から「大阪の神社」

それでは、どんな寺社が識者の方から出されたのか、ここでは大阪の神社についてかいつまんでご紹介します。

大阪の寺社と年中行事ということで、まず、まんが編集者でライターの中野晴行氏が、堺市の開口神社についてあげています⁽³⁾。堺では有名な神社で、最近隣に大きなマンションが建ってしまったところですが、今でも非常に賑やかな神社です。

開口神社—子供の頃みたサーカス

堺市。天平年間、行基が境内に念仏寺を建立、「大寺」とも言われる。

◆昭和38年(1963)に堺市に引っ越した頃、まだ境

内に街頭テレビがありました。大寺マーケットという市場がありました。すぐ横の山之口商店街がにぎやかでした。一度、境内にサーカスが来たことがあります。テントが張られて、子供たちは行きたくてしょうがないのに、親は「さらわれる」などと脅かすのです。それでもとうとう根負けして連れて行ってくれました。その後で見たどんな立派なサーカスよりも楽しかったのを覚えています。

(中野晴行・まんが編集者、ライター)

阿倍野研究家の難波りんご氏は、安倍晴明神社をあげています。ちょうどあさって、2005年9月26日に晴明の1000年祭が行われることになっています。

**安倍晴明神社—安倍王子神社の末社。2005年に
安倍晴明千年祭を開催
大阪市阿倍野区。陰陽師安倍晴
明の生誕伝承地と言われる。**

◆平安時代に卓越した能力を発揮し、宮廷陰陽師として活躍した安倍晴明の生誕伝承地。熊野街道沿いにあり、古樹が茂る境内には『摂津名所図会』にも描かれている安倍晴明誕生地の石碑、晴明産湯井が残っている。2005年は安倍晴明没後1000年にあたるため、2005年9月26日(命日)に、安倍晴明千年祭が行われる。

(難波りんご・阿倍野研究家)

雑誌「大阪人」の編集長、北辻稔氏は石切神社をあげています。文末に「庶民が見つけた言い訳のできる楽しみのひとつであろう」と、神社に行く楽しみについてお書きいただいています。

石切神社—行く度に元気がでる

東大阪市。石切参道商店街でも有名。

◆石切神社は、やや慣習的に詣でる神社で、行く度に何かしら元気を頂いてくる。まず驚くのは、境内でお百度参りをするひとびとの圧倒的な数である。休日などは、100人は超えるひとびとが次から次へと列をなして黙々と駆け回っているのである。比較的早足で、若い、それも女性が多いように思う。ややうつむき加減で、何かを念じながらひたむきにお百度を踏んでいる。世の中には悩みを持つ人が多いのだなあ、とつくづく思うのである。(中略) こういう身近に、

緊急に助けを願う、切実な信者さんによっていつも石切さんは人で溢れている。これがまさに庶民のエネルギーというものかもしれない。そして、神社前の坂道の参道にぎっしりと並んだお店。毎日縁日気分、おすなおすなおのごみである。お参りがすんで、まずは食堂に入り、ビールとおでん、うどんなどを食べ、これまた精進上げをして、参道をぶらぶらする。いつも決まって購入するのが、味噌とラッキョウである。無農薬、自然食がほとんどで、ここで買う味噌とラッキョウの味を占めると他では買えない、というほどおいしいのである。だからまた出かけなければならない。身体的なおまいりと、身体に良くおいしいものが並ぶこの参道の楽しみはセットで、老若男女ついつい出かけてしまう神社なのである。もともと庶民のお宮さんとは、こういうもので、庶民が見つけた言い訳のできる楽しみ方のひとつであろう。

(北辻稔・『大阪人』編集長)

次に、料亭「花外楼」の女将、徳光清子さんが、お正月はえびすさんから始まるということで、今宮戎さんの紹介をされています。大阪天満宮については、は太田房江大阪府知事がご紹介されています。

今宮戎神社—お正月はえびすさんから

**大阪市浪速区。聖徳太子が四天王
寺を建立時祀ったのが始めと伝え
られる。**

◆商都大阪にとって商売の神様“商売繁盛で笹もって来い”今宮えびす神社である。1月10日が本祭であるが、8日には献茶式、表千家家元が神前に献茶される。副席においてお抹茶をいただき、又点心席は花外楼と吉兆と交代に奉仕させて頂いている。福娘は大人気でよい縁に結ばれるというのでその選抜には数百人集まり、選ばれた福娘はお祭の間ずっと揃いの衣裳で奉仕する。宝恵かごも賑やかで境内では笹売りの声のにぎやかである。本殿に参拝した後、必ず神殿のうしろに廻り、ステンレスの大きな太鼓に「おまいりに来ましたで」とドンドンとたたく。之は、えびす様はお耳が遠いのでしっかりと聞こえるようにという昔からの習慣なのである。紅白や

(3) 前掲(2)冊子、第1章「寺社からみえる関西」より抜粋

えびすさんの飴をお土産に買うのも楽しみの一つ、お正月はえびすさんから始まる。

(徳光清子・花外楼)

大阪天満宮—大阪の夏は天神祭を抜きにしては語れない

大阪市北区。学問の神、菅原道真公が祀られる。日本の三大祭り「天神祭」も有名。

◆学問の神様として有名な菅原道真公を祀った大阪天満宮は、これまでいくたびかの火災に見舞われましたが、そのたびに大阪の皆さんの力で復興され、現在も「天満の天神さん」の愛称で多くの方に親しまれています。ここ天神さんを中心に繰り広げられる天神祭は、日本三大祭として有名で、千年を越える歴史と伝統を持つ祭です。毎年多くの浪速っ子が楽しみにしており、府外からも多くの方がお越しになられます。大阪天満宮を出発する陸渡御の行列や大川を進む船渡御など見ごたえいっぱい祭で、そのほかにも、勇壮な神輿がまちを練り歩く姿や夜空を彩る花火など本当に素晴らしく、大阪の夏は天神祭を抜きには語れません。皆様も是非、この天神祭をはじめとした大阪の魅力を堪能してみてください。

(太田房江・大阪府知事)

その他、お初天神、誉田八幡宮、柴籬神社、神農さんなども紹介されています。なかには当然、有名などころもあれば、有名でないところもあります。有名でないところの代表が、歯神社です。詩人、エッセイストの寺田操氏が、自分たちの住む町の小さな歴史や古譚を知る・知らせる情報発信は、インターネットの時代だからこそ掘り起こさないと、これも注目に値するであろうということでご紹介されています。

歯神社—インターネットの時代だからこそ

大阪市北区。淀川の氾濫を歯止めしたことから命名。

◆都市には、普段気づかず行き過ぎてしまうのに、何かのときにふと立ち止まると視界に入ってくる小さな小さな神社や祠がある。そのひとつ、大阪梅田の角田町歓楽街の片隅に、ひっそりと建っていた「歯神社」。宇賀御魂大神を祀り、

地域農民の信仰を集めていたとか。名前の由来は、淀川の氾濫を歯止めしたことにつけられたという。地元では歯の神様「はがみさん」として親しまれている。社殿左の黒光りする「なで石」をなでると歯痛が治まるそうだ。自分たちの住む町の小さな埋もれた歴史や古譚を知る・知らせる情報発信は、インターネットの時代だからこそ掘り起こさないと。思う。

(寺田操・詩人、エッセイスト)

泉佐野市にある船岡神社は高山恵太郎氏よりご紹介いただいています。

船岡神社—元旦にそろってお参り

泉佐野市。神功皇后が新羅との戦いの帰りに立ち寄ったという伝説。

◆一家を構えたころの自宅にもっとも近い神社だったので元旦には家族そろってお参りした。船岡山という小さな山が御神体で田舎のさびれた神社である。宮司さんがお元気な頃は周りのひとびとから慕われたが、いなくなってから神社もさびれた。現在は寄附を集め、氏子さんたちで復活して守りつづけている。

(高山恵太郎・たる出版代表取締役)

こういった神社も含め、いろんな形で神社をご紹介いただいています。

冊子『関西と寺社』を作るにあたっては、そちらの方が目に付くこともありますし、皆さんから寺社の写真や住所を入れてほしいといった要望をいただいたのですが、当方の狙いというのは何度も繰り返しますが、識者の意見を市民の方に伝えるということにあります。

したがって、寺社の紹介にももちろん重きをおいてはいるのですが、識者の目から関西の姿を探る、ということで、これからの寺社とのかかわり方や将来の展望、ここに我々の活動の本意があることも考えていただきたいと思います。現状目に見える文化財、建築物としての寺社ではなく、人々や地域との関係からどうかということを知りたかったということです。

そういった意味で、これからの人々と寺社とのかかわり方や将来の展望については、率直に言いますと、識者の皆さんから批判的な内容が数多く寄せられました⁽⁴⁾。例えば、どこもかしこも駐車場にしまってよいか、境内に入るだけで拝

観料を取るのをおかしい、というような点も多く指摘されました。ただし、こういった批判的な内容を個別に紹介することが冊子『関西と寺社』の本意ではありませんので、識者名を明示してとりあげず、まとめて紹介するにとどめました。

4. 寺社から見える関西の姿

ここで私が考えますのは、今後の寺社と人々との関係について、できる限り発展的に捉えて欲しいということです。それに関しては、識者の方も多く語っていますが、少子高齢化社会の中で、寺社が人々とどう関わっていくのかということがメインとなっています。

まずは、少子化ということです。少子化が寺社に与える具体的な影響というと、寺院に関しては檀家数が極端に減っていきます。檀家が減っていくのは今更のことではありませんが、これが減っていきますと、地域的な収入がどんどんなくなっていきます。しかし、ただこれに手をこまねいている寺院ばかりではありません。例えば、一部の寺院では、檀家をなくし、会員制のような仕組みを発足して、イベントやお祭りなどに際して、寺院を地域に開放する動きが始まっています。こういうことが、今後の対応のひとつのヒントとしてあげられるのではないかと思います。神社と少子化では、お祭りとの関係においてどうなるかという問題点もあげられます。寺院よりも神社の方が地域密着的な性格が強いので、少子化が進めば間違いなく氏子数が減っていくという問題点の方がより深刻なものとなります。

私は今年初めて天神祭の渡御船に乗りました。楽しいし、大阪締めを交わす姿は大変和やかでいいものです。しかし、神社とお祭りの間でただ楽しんでいていいのだろうか、とも思いました。一方で神事に取り組む多くの氏子さんたちがいらっしゃるわけです。

私は、堺市の南の高石市に住んでいます。明日、高石市ではだんじり祭りが行われます。岸和田市では15日に有名なだんじり祭りが行われました。だんじり祭りというのは、元々、江戸時代に五穀豊穡を願って始まったお祭りだと聞いていますが、近年、だんじりを新造するところが非常に増

えてきたという話です。なぜかというと、少子化が今後より一層進行し、お金がなくなって困ることになるため、先細る地域の財力などの問題を今のうちに解決しようといった思惑があったと思われる。

また、岸和田のだんじり祭りについて言えば、将来の少子化を視野に入れて現在の地域密着型の祭りから地域開放の動きへと変わっていくのだろうか、あるいは、宮入りをクライマックスとする祭りの形態が今後どう変わっていくのだろうかということも、今後の神社と祭りと地域とを考える材料なのではないかと考えています。

祭りというと、見所はとにかく一点集中型になりがちです。岸和田のだんじり祭りでも、勇壮な「やり回し」だけが注目されますが、やり回しの終わった後の夜、静々と行われるだんじりの巡行は非常に幻想的な光景でもあります。一方で、巡行は、やり回しに参加できない小さな子どもたちにとって、だんじりとの関係、地域との関係のスタートになります。だんじり好きな岸和田っ子が育つのは当たり前という感じがします。

大阪の話ではありませんが、祇園祭についてもこのような話を聞いたことがあります。祇園祭は山鉦巡行がハイライトだという見方が一般的ですが、前後の祭礼にも非常に見所は多いのです。以前、京都の地元の年配の方に聞いたところ、祇園祭は、山鉦巡行が終わったその日の夜中に町内を回る神輿があり、この音だけを聞きながら、飲み屋で一杯やるのが最大の楽しみだ、というような話をされました。

お祭りも多様化しつつ、少子化への対応もしていかなければならないということが、私の問題意識としてあります。

次は、高齢化の問題です。年齢を経ると、若い時には興味なかったこと、例えば寺社や宗教に対する関心がどんどん高まってくると思われそうですが、それに対する寺社側の対応はどうなっているのでしょうか。癒しの場として、十分その機能を果たしているのかどうか、またそこでは精神生活に関わることでいいのかという課題もあります。

識者の意見の中にも、実現するには困難が多い

(4) 前掲(2)冊子、第4章「これからの寺社とのかかわり方—将来の展望」

とは思いますが、寺院に介護施設をつくるというのはどうかというご意見もありました。

元々、寺社は、今のような宗教的な機能だけではありませんでした。明治以前はさまざまな機能を果たしてきた場でした。

寺院はその名の通り、寺子屋といわれたように教育の場、そして、福祉の機能を果たしてきた歴史があります。

神社も当然のことながら純粋にお参りだけの場ではありませんでした。大阪の生国魂神社に行きますと、目に入るのが周囲を取りかこむラブホテル群です。あれをみて、せっかく生国魂神社という素晴らしい神社があっても、まわりがラブホテル群では行ってもしょうがないだろうと思うのもひとつの実感です。

これを、聖と俗との同居として、いかにも大阪らしいとする見方もありますが、もともと生国魂神社の周りは、ラブホテルはともかくとしてもお参りするのための宿泊施設が多く存在していたという経緯を考えれば、歴史的にはおかしくはないようなことでもあります。

また、江戸時代にはこんな川柳もありました。「伊勢参り大神宮にもちょっとより」。江戸時代、お伊勢信仰は大変盛んであったといいますが、では参詣者が何を考えてお伊勢参りをおこなっていたかと言えば、本来の目的だけではなく、遊び・観光的な側面も大きかったと思われれます。そういったところも、今後の地域、社会との関係で、生かす道があるのではないかとすることも考えたりします。

明治以降、日本の国がどんどん大きくなっていく中で、それまで寺院や神社が持っていた機能がどんどん失われていきました。私個人としては、神社や寺院に、もう一度明治以前の機能とそこまではいいませんが、かつて持っていた地域的、社会的機能を考えていただきたいとも思います。そういった課題を、例えば環境問題、社叢の森も含めた自然環境問題、それから地域とのコミュニケーションの問題も含めて研究していったら面白いのではないかと、研究を進めていくべきだろうと考えています。

それらについては、今回のようなレクチャーシリーズ、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究セ

ンターのリーダーシップや活動を通じて進められることを期待しています。私も微力ながら、ご支援するつもりです。

真野修三（明治安田生命 関西を考える会）

京都大学文学部を卒業後、明治生命保険（現・明治安田生命）に入社。業務開発部、生活福祉研究所研究員などを経て、2004年1月から関西を考える会代表に就任。

大坂三郷の氏神さんと夏祭り

近江晴子

1. 江戸時代の大坂の町—大坂三郷

大坂三郷といえますのは、江戸時代の大坂の町のことを指します。北郷・南郷・天満郷の三つの郷、あるいは北組・南組・天満組と呼ばれることの方が多のですが、その三つの行政区画から形成されていたので大坂三郷と称されました*。

江戸時代の大坂の町—大坂三郷—の範囲ですが、図1の地図が明治36年3月25日に発行されました「第五回内国勸業博覧会観覧必携〈大阪全図〉」ですが、だいたいこの地図に掲載されている中心部と考えていただければいいと思います。この地図の下の方に描かれております難波、天王寺のあたりは、難波村、天王寺村でしたし、地図の上の方、天満の北は、川崎村、北野村、曾根崎村となって、大坂三郷には含まれません。ですから、現在の中央区と、北区の南半分くらいと西区の東半分くらいの範囲が江戸時代の大坂の町でした。

ここで、「増脩改正摂州大阪地図」を使って、大坂三郷についてご説明したいと思います(図2、図3)。この地図は文化3年(1806)に出ました大阪の地図ですが、江戸時代に発行されました大阪の地図の中で一番大きな範囲を取り上げております大判の地図で、記述が正確とされていますのでよく使われる地図です。この題字の「増脩改正摂州大阪地図」の大阪は阜偏の「阪」をつかっております。

この地図では、大坂三郷のうち、天満組に属する町には白三角(△)印がついています。北組に属する町には、黒丸(●)、南組に属する町には黒三角(▲)がついています。天満組は大川一堂島川以北で、北組との境界ははっきりしていますが、北組と南組の境はちょっと入り組んでおります。船場の中では、本町と安土町の間を背割り下水を境にして、北側が北組、南側が南組となっております。ただ、南御堂さんの裏手(西側)では、南組のところへ北組が入り込んでいます。船場といえますのは、大川—土佐堀川と東横堀川・長堀

川・西横堀川の四つの堀川に囲まれた長方形の土地です。船場の南側の四角形の土地が島之内で、長堀川・東横堀川・道頓堀川・西横堀川に囲まれています。西横堀川から西、現在の西区に入りますと、北組と南組の境界は船場内より少し南にずれています。そして、堀江(北堀江・南堀江)のあたりは、南組・北組・天満組が入り組んでまいります。今度は東横堀川の東側、お城に近い方では、いわゆる上町ですが、北組と南組の境界は、船場の境界が東横堀川を越えて東側に続いており、一部北組の領域へ南組が入り込んでいます。こうして、あちこちで入り込んでいるところがありますが、江戸時代の大坂の町は全体として、北から天満組・北組・南組の三つの組で構成されていきました。ですから、西横堀川は、明治以後に東区と西区を分ける境界の川になったのであって、江戸時代では境界の川ではなかったのですね。

幕府の役人が住んでおりましたところは、お城の南側一帯と、天満です。天満には、大坂町奉行配下の与力・同心の屋敷がありました。天満川崎のあたり、現在の造幣局のあたりには、川崎東照宮が祀られていて、お宮の東側と北側に大坂町奉行与力の屋敷がありました。また、天満寺町の北側にも大坂町奉行与力・同心の屋敷がありました。これら、幕府役人の居住地は大坂三郷には含まれません。また、寺と神社の土地も大坂三郷には含まれず、大坂三郷はあくまで町人の住んでいる地域でした。

大坂三郷の北組・南組・天満組には、それぞれ惣会所が設けられておまして、それぞれの惣会所の下には各町に町会所が設けられております。大坂町奉行所からの通達は惣会所から町々の町会所へ伝達されます。このようにきっちりと行政の仕組みが出来上がっておりますので、東西両町奉行所の与力・同心、わずか200人たらずのお役人で、江戸時代の大坂の町、幕末期の町数は約620町あったといいますが、その大坂三郷を取り仕切っていたわけです。

2. 大坂三郷の氏神さん

ここで再び図1の「第五回内国勸業博覧会観覧

*大阪は、江戸時代では大坂と書かれることが多く、明治に入って大阪と改められましたが、本稿では大阪に統一しました(大坂三郷、大坂町奉行などは省く)。

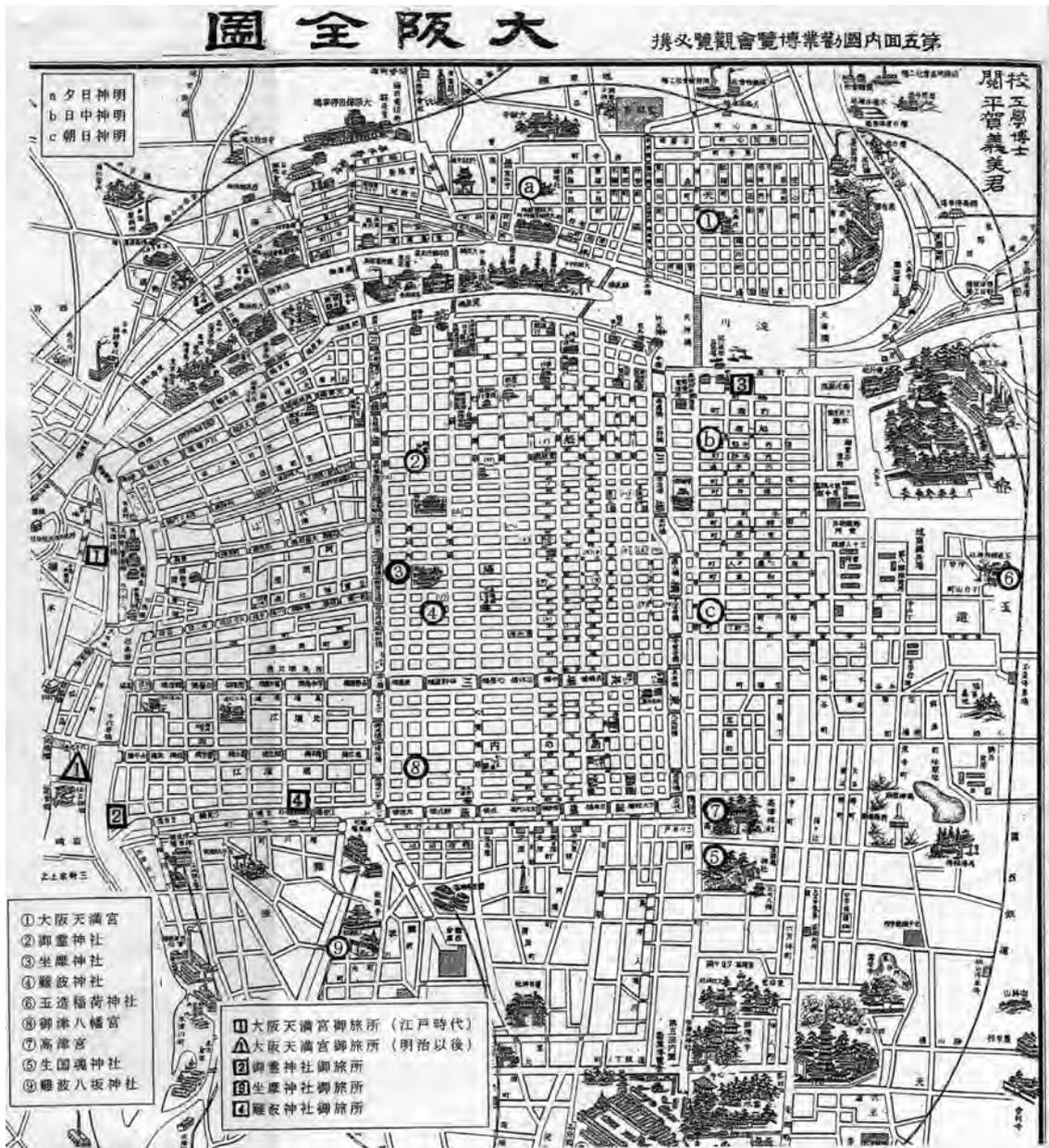


図1：第五回内国勸業博覧会観覧必携〈大阪全図〉（大阪天満宮蔵）

必携「大阪全図」をご覧ください。この地図は明治36年に大阪で第5回内国勸業博覧会が開催されたときに発行された、会場案内図の裏面に印刷された大阪の地図です。表側には、博覧会場の建物の案内図が出ております。ちょうど1970年の大阪万博や1990年の花博のときに、たくさんの会場案内図が発行されて、私もはそれを手にして見物に出かけましたね。それと同じものでして、裏側にこの大阪全図がありました。非常に面白い地図で、建物がみなイラストでちゃんと書いてあります。勸業博覧会の会場は、地図の一番下、一心寺の西隣に描かれております。

現在、旧大阪三郷内に氏神さんは9神社あります。地図の上に①から⑨までの番号で示しているのが、氏神さんです。①が天満の天神さん（大阪天満宮）、②③④が船場の中の氏神さんで、北から②御霊さん（御霊神社）、③坐摩さん（坐摩神社）④難波神社の3神社です。それから島之内には⑧御津八幡さん（御津宮・御津八幡宮）がございます。それからお城の南に⑥玉造稲荷さん（玉造稲荷神社）がございます。それから⑦高津さん（高津宮）ですね。この⑦高津宮は大坂三郷の端っこに位置しています。もちろん高津宮の土地は大坂三郷外になりますが、⑤生玉さん（生國魂神社・

生玉神社)と⑨^{なんば}難波八阪神社は大坂三郷の外に位置していますが、氏地を大坂三郷内に持っておられますので、ここで取り上げています。これら9社の神社は江戸時代から場所は変わらず現在ももとの場所に鎮座しておられます。これらの神社の他に大正13年に鶴町(現大正区)に移転された平野町神明宮(日中神明)について『撰陽奇観』に内平野町、船越町、内淡路町ほか数町を氏地としてあげていますので、大坂三郷内の氏神さんは10神社あったことになります。



図2：増脩改正摂州大阪地図
(『近畿の市街古図』鹿島出版会)

図4の「明治以降大阪の氏地区分」図は、昭和59年に私が大阪天満宮文化研究所へ参るようになってから、3年目の昭和62年に大学の後輩で、地理学専攻の糸井洋子さんが、修士論文のテーマの一つに「大阪の氏神さんの氏地」をやりたいということで、たずねて来られまして、そのときに糸井さんが作成された氏地区分図です。氏地の史料といいましても、現在氏地の史料が残っている神社は、大阪天満宮のみです。大阪天満宮以外のお宮さんは、すべて昭和20年の空襲で被災され、貴重な史料が失われました。それで糸井さんは、『東区史』、『西区史』などの各区史や『大阪府全志』などのわずかな記述をつなぎ合わせて氏地区分図を作成されたようです。明治以降大阪の9神社の氏地区分がひと目で見る事が出来て、すぐれた地図だと思います。

⑤の生國魂神社は上町ほとんどを氏地にしていらっしゃる。といいますのは、生國魂神社さんはもともと、上町台地北端の難波宮跡のあたりに鎮座しておられたのですが、秀吉が大坂城築城の際に現在地に移転させたわけですね。その前に蓮如が大坂本願寺を築きますが、「天文日記」などに御坊に近接して生玉社があったということが出てきます。

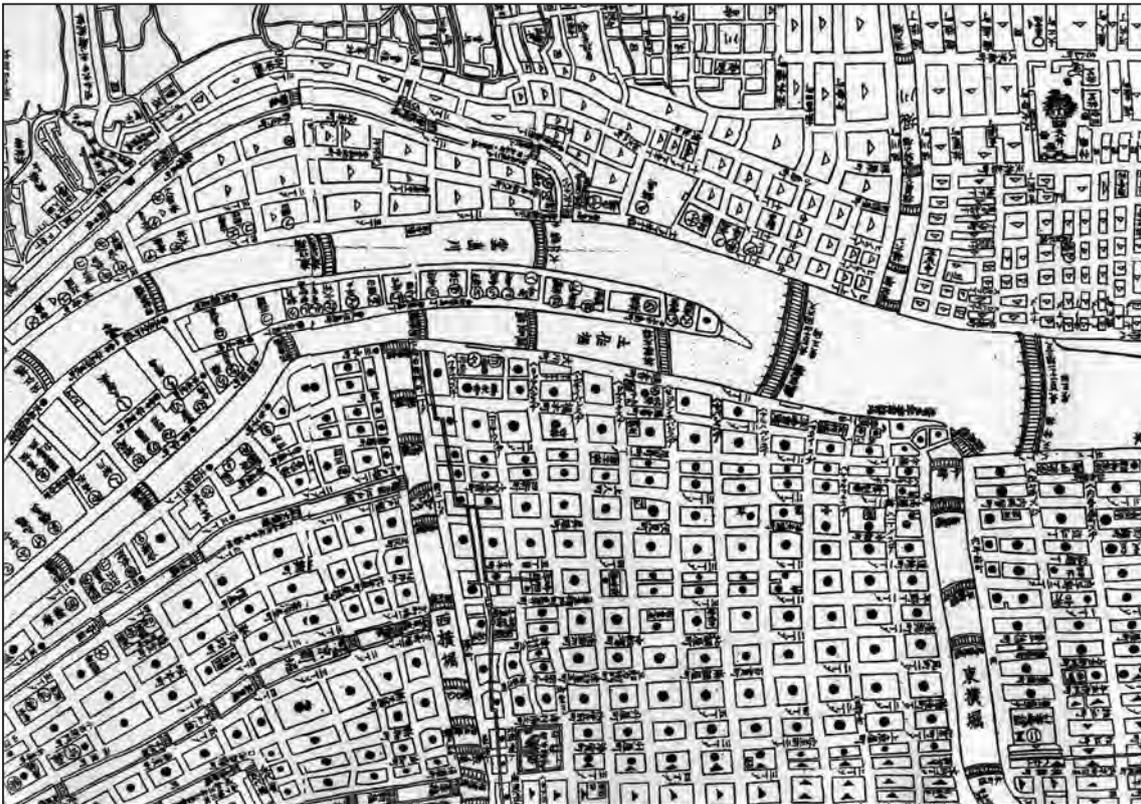


図3：増脩改正摂州大阪地図 (部分拡大)

ここで、大坂三郷の氏神さんの夏祭礼日を見ておきましょう（図5）。江戸時代は旧暦6月の13・14日の難波八坂神社から27・28日の生國魂神社まで、ほぼ毎日夏祭りが続きます。祭礼が無い日は19・23・26日の3日間だけです。江戸時代は6月が大阪の祭り月だったわけです。これらの夏祭礼日は、明治5年12月から太陽暦が採用されたので、やがて6月のお祭りを7月に1ヶ月ずらすことになって、明治以後現在まで、7月が大阪の祭り月となっています。天神祭の祭礼日を1ヶ月ずらすことになっていく経過を、大阪天満宮所蔵「大阪天満宮文書」の「公庁諸願届書写」「当番所雑記」などから年表にして載せてあります（図6）。この年表によりますと、太陽暦になった明治6年

から10年まで、この間は、毎年その年の旧暦6月24・25日は新暦ではいつにあたるのかと、新暦にあてはめて決めておりますので、毎年お祭りの日が変わっておりますね。明治11年からは単純にひと月飛ばして、7月24・25日を夏祭礼日としております。大阪天満宮以外のお宮さんにつきましては、史料が残っておりませんので分かりませんが、おそらく、大阪天満宮の場合と似たような状況と考えると、ほぼ同時期に他神社も祭礼日をひと月ずらされるようになったのだと思います。

また、現在、夏祭礼日を変更しておられるお宮さんが2、3社ございます。生國魂神社さんでは、明治に入ってから、7月8・9日が夏祭礼日となったようです。現在では、7月11・12日が夏祭礼日です。御霊神社さんでは、船場のビジネス街の真ん中ですから、まわりにお住まいの人が極端に少なくなってしまうと、7月16・17日の祭礼日が土日にあたりますとなかなかお詣りに来れないということになりますので、その場合は、ウィークデイに変更しておられます。そういう風にみなさんえらい苦心していらっしゃいます。

ここで、9神社のなかでただ1社、空襲を免れて貴重な江戸時代の史料を今に伝えておられる大阪

①大阪天満宮	旧暦 6月 24日、25日
②御霊神社	旧暦 6月 16日、17日
③坐摩神社	旧暦 6月 21日、22日
④難波神社	旧暦 6月 20日、21日
⑤生國魂神社	旧暦 6月 27日、28日
⑥玉造稲荷神社	旧暦 6月 15日、16日
⑦高津宮	旧暦 6月 17日、18日
⑧御津八幡宮	旧暦 6月 14日、15日
⑨難波八坂神社	旧暦 6月 13日、14日

図5：大坂三郷の氏神さんの夏祭礼日

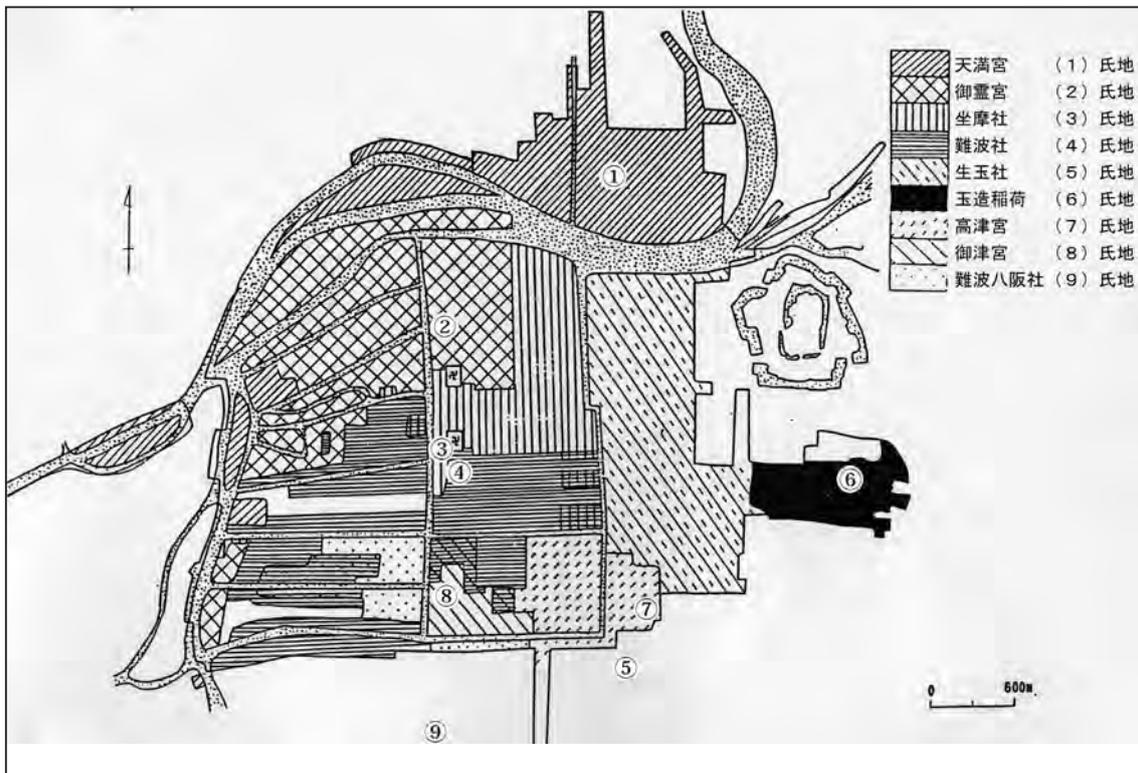


図4：明治以降大阪の氏地区分（糸井洋子氏作成）

天満宮のお話を少しさせていただきます。

大阪天満宮は昭和20年の空襲を免れたといいますが、江戸時代には7回も火災に遭ってまいりまして、一番大きい火災は享保9年（1724）3月の妙知焼でした。そのときは大阪の町全体が丸焼けになったような大火災でした。大阪天満宮もやはり被災され、そのため現在大阪天満宮に残っております史料はほとんど享保の大火以後の史料でございます。その妙知焼以後にも何度か火災がありました。とくに天保8年（1837）2月に大塩事件が起こって、大火となり、大阪天満宮は被災しました。このとき、「御文庫」も焼失して、収蔵していた書籍類は焼けてしまいました。せっかく大阪の書籍商のみなさんが奉納してくださった本も、すべてそこで焼いています。現在、大阪天満宮御文庫には貴重な書籍がたくさん収蔵されておりますが、だいたい大塩焼以降に奉納された書籍でございます。大塩焼の際、御文庫は焼けてしまったのですが、現在『大阪天満宮所蔵古文書目録』に分類整理して載せております古文書類は焼失を免れて、残りました。

大阪天満宮の天神祭は、江戸時代は6月24・25日に斎行されておりますが、25日に船渡御（川渡御）が行われます。この6月25日に「長潮」という現象が起こるのです。潮の干満の差が非常に少なくなって、いつも川は滔々と流れ、十分に水をたたえているという風な状態の日なのです。陰暦で、毎月10日と25日は長潮現象が起こるのです。船渡御が行われる堂島川から木津川は、淀川が運んできた土砂が堆積しやすく、水深が浅くなっ

て、渡御船列の航行が妨げられる心配があったのですが、6月25日については、長潮のおかげで、神輿船は安けく還御されるとして、「貰い汐」と言い習わしてきたと『摂津名所図会』（寛政10年刊1798）に記されています。さて、大阪天満宮では長潮のことを知っていて、6月25日を夏祭礼日に選ばれたのかどうかは分かりません。天神祭の一番古い記録は、宝徳元年（1449）中原康富が日記『康富記』に7月7日、七夕さんの日に書いた「川崎之鎮守、天神之祭礼也」という記事です。それから約140年ほど後、天正15年（1587）公家山科言経の日記『言経卿記』には、6月25日、「天神社へ祭礼見物」とあって、天神祭の日が6月25日に変わっています。大阪の川というのはすぐ海に直結しておりますので、大阪湾の満潮・干潮に影響されるのです。私は、戦後西横堀川浜の家で育ちましたので、いつも、川に少し張り出した出窓から川を眺めていたのですけども、普通の川と違って、面白いですね。上げ潮のときと、引き潮のときで、流れの方向が変わったりします。それから大潮の日の満潮のときには水位が上がって、川岸の石垣ぎりぎりまで水がきます。逆に干潮になると、川岸近くは底が見えるぐらいになります。そういう川でした。ですから天神祭でも、昔はしょっちゅう土砂がたまりやすく、大潮の時の干潮になると、船の航行がしにくくなるのです。そういうことですので、川が水をたたえているということが非常に大事なことだったのです。それが偶然なのか長潮の現象が起こる日に船渡御していたわけです。ところが、明治11年以後は新暦

明治4年	6月24・25日	船渡御復活	
5	6月24・25日	〃	12月から太陽暦に
6	7月18・19日	陸渡御	右川筋土砂浚等難行届候二付
7	8月6・7日	〃	
8	7月24・25日	〃	
9	8月13・14日	〃	
10	8月3・4日	〃	
11	7月24・25日	渡御なし	本社営繕中のため
12		渡御なし	コレラ流行のため祭礼当分ノ内延期（府庁布達）
13	7月24・25日	陸渡御	
14	7月24・25日	船渡御復活	
15	7月24・25日	〃	
16	7月24・25日	〃	
17	7月24・25日	〃	
18	8月24・25日	渡御なし	夏祭礼は淀川洪水のため1ヶ月延期
19			夏祭礼延期奏上。コレラ流行のためか
20	7月24・25日	船渡御	

図6：天神祭明治初期祭礼月日（大阪天満宮文書）公庁諸願届書写・当番所雑記他による

の7月25日に船渡御を斎行することになって、その年によってどんな汐の状態にあたるか分からなくなってしまうのです。戦後は、逆に、地盤沈下のために大潮のときなど、船上の御神輿が橋桁に衝突したりして、昭和28年から川上に遡航する船渡御に変更されて今に至っております。

ここで、ちょっと、大阪の三神明さんについて簡単にご説明をしたいと思います。図1の地図に、③夕日神明（難波神明宮）、⑥日中神明（平野町神明宮）、⑦朝日神明（朝日神明宮）の三神明の場所を示しておきました。夕日神明（ゆうひのしんめい）さんは、明治40年に露天神社（つゆのてんじん・お初天神）に合祀されました。それから日中神明（ひなかのしんめい）さんと朝日神明（あさひのしんめい）さんは移転されました。日中神明さんは、明治40年に社号を神明神社と改め、大正13年に鶴町へ移転されました。朝日神明さんは、明治40年に川岸町の皇大神宮に合祀されて朝日神明社となり、昭和6年に此花区春日出に移転されました。この地図は明治36年発行ですから、三神明とも載っていますね。

なぜ、夕日神明さん、朝日神明さん、日中神明さんと呼ばれるようになったか。確かなことは分からないようですが、どうやら社殿の向きが、夕日神明さんは西を向き、日中神明さんは南を向き、朝日神明さんは東を向いているというようなことらしいです。日中神明と朝日神明はちょうど松屋町筋に面して並んでいます。天満の天神さんもずっとその延長上に位置していますね。この松屋町筋あたりが、平安時代の海岸線と言われています。このあたりぐらいまでは、大阪湾が入り込んで来ていたわけですね。ですから京の都から熊野詣に行かれるときに、この地図の天神橋から天満橋あたりの浜に船が着いて、ここから熊野詣の第一歩がはじまるわけですね。ちょうど船が着くあたりに③の印をしてありますが、ここは坐摩神社の御旅所です。石町2丁目にあるのですが、この地図では石町の通りを省略してしまっております。この坐摩神社の御旅所の場所が、もともと坐摩神社があった場所ではないかと推定されております。石町の坐摩神社御旅所の場所と松屋町沿いの日中神明さんの場所を、熊野九十九王子の第一

王子である窪津王子あるいは渡辺王子の場所に比定する説もあります。このあたりから熊野詣がはじまるわけですね。石町の町名の由来はいろいろ説がありますが、一つは摂津国府の地であったためとし、後世石町と書き誤ったとする説です。また、一つは神功皇后が新羅から帰還されたときこの地に到着され、この石に腰をかけて一服されたという伝承があり、石町はその石に因むというものです。現在も坐摩神社御旅所鎮座石が祀られております。松屋町をもう少し南に下がったところに朝日神明さんがありますが、その場所が熊野九十九王子の坂口王子かともいわれております。朝日神明さんは、また逆櫓社と俗称されました。ここにも又伝承がございまして、今年のNHK大河ドラマで源義経と梶原景時の逆櫓論争ができましたが、その舞台がここであるというのです。福島の方にも逆櫓の松というのがありますが、この朝日神明さんにも逆櫓論争の伝承がありました。

3. 船場の氏神さん

御霊神社・坐摩神社・難波神社

船場の中のお宮さん三社、御霊神社・坐摩神社・難波神社、この三神社のお祭りを取りあげてみたいと思います。それについて、私自身の体験を少し交えながらお話しします。大阪船場では、戦前まで、江戸時代以来のお祭りの風景がよく残っていたようです。私は戦後の船場で育ちましたので、戦前の華やかな夏祭りを体験することはできなかったのですが、両親や年長の方にいろいろ聞きましたところ、氏神さんのお祭りとなると、町全体がガラッと様子を変えてしまうというわけですね。仕事は全部お休みで、町全体でお祭りをする。どこのお家も表には家紋のついた幔幕を張り、提灯を吊します。たいてい、上が茶色か浅葱色で下が白の二段の幕です。店の間を開け放ってそこに家宝の屏風を立てます。図7、図8に絵がありますが、そこのお家の御寮人さんや嬢ちゃんは晴れ着を着てお客さんの接待をするというふうな。もう町をあげての大騒動になるわけです。男の子のいるところは男の子の数だけ、御神灯と書いた箱提灯を立てます。棹が青貝の飾りの付いた立派なもので、上にすごい飾りのついた

ものだそうで、うちには、ちゃんと跡継ぎがおりまっせということを見せているのでしょうね。

そういう風に、もう町中がお祭り一色になりまして、日常のケの暮らしとは一変するハレの暮らしが、ハレの日がやってくるのですね。とにかく、町の様相がガラッと変わってしまうのは、お正月と夏祭りの年2回なのです。そういう町をあげての楽しいお祭り、大人がもう夢中になるお祭りというのは、それは子供にとったらどんなに楽しいワクワクすることだったでしょう。私は残念ながらそういう体験はできませんでした。ただ戦後、御霊さんも坐摩さんもみんな焼けてしまわれたので、お祭りも寂しいものになったのですが、道修町の神農さんのお祭りが、ちょっとそういう雰囲気がありましたね。神農さんすくなひこな（少彦名神社）は氏神さんと違いまして、道修町の葉屋さんの神さんですけれど。その道修町全体が町をあげてのお祭りをしていました。それがもっと大きく氏地全体に広がるわけですね。そういうお祭り風景です。

図7、図8に難波神社の蒲団太鼓の図と坐摩神社の車楽（だんじり）の図を載せておきました。両方とも『摂津名所図会』からとりました。『摂津

名所図会』が寛政8年から10年（1796～98）の刊行で、その3、4年後に、大田南畝が大阪へやってきます。大田蜀山人、あの狂歌で有名な方ですが、この方は江戸のお役人です。単身赴任で一年間、享和元年（1801）3月から翌年の3月まで大坂銅座御用を勤めます。53、4歳ぐらいでした。南本町5丁目の宿舎から今橋の銅座へ出勤します。お勤めは朝8時から午後2時まで。その後はフリーになりますので、大阪中見物して歩きまわられるわけですね。それで『蘆の若葉』という日記を残しておられますので、当時の様子が非常によくわかってありがたいんです。その中に船場の3神社、御霊神社、坐摩神社、難波神社の夏祭りの見物記があります。

大田南畝の大阪夏祭り見物記 享和元年(1801)
『蘆の若葉』より

(六月)十七日 晴

御霊の祭みんとて、高麗橋の西のかたなる市店にいれば、ゆきかふ人賑はし。折々何やらんどよみあへるを見るに、頭にいろいろのかつらきて、手に何やらんもち来たりて、さるがふ事いひもてありくは、俄といふものなり



図7：難波神社 蒲団太鼓（『摂津名所図会』寛政10年〈1798〉刊）

けり。(中略)ややありて鼻高き面きたる猿田彦の神馬にのりてわたる。亀井隠岐守のみうちより、鎗弓もてる士を出して祭りをたすく。(後略)

廿一日 晴 晩雨又晴

仁徳天皇稻荷明神の祭なりとて、人家の軒に菊桐の紋つけたる桃灯をかかぐ。祭わたるべき大路は、埒をゆひてみだりに人を通さず。家々の前にも手すりをまうく。博労町のほとり見にまかりしに、所謂だんじりのごときものに似て、檜皮ぶきなる上に、錦の茵五ツばかり重ねしきて、下には童部ども筒長き頭巾きて、中に大きな太鼓をすへ、めぐりよりこれをうつ音かしがまし。きほひ、いさめる若きものども二三十人ばかり、此車をひかんとて、先にたちて、てうさや、ようさやと口々によぶ。そのあとより、れいの俄といふものあまた来たりしかど、ここの心をわかたねばかひなし。ややありて太鼓の音聞こゆるに、かの猿田彦の神馬に乗りてわたる。(後略)

廿二日 晴

けふは座摩の宮の祭なり。きのふみし段じり二ツは、朝の内より本町のわたりを引しと

ぞ。道修町より出せるだんじりは、前の柱に竜まきつきたり。又一ツなるは、十二浜のわたりより出せるなりとぞ。(中略)やうやう申の時前に太鼓の音きこゆ。大きな太鼓を中にすへて、左右に毛氈をもてつつみたるものをよりかかり所とし、赤き色の長き頭巾をかぶりたるわらべども太鼓をうつ。これを荷ふものは、みないさみきほへる若者ども、襷などかけし多し。高張の桃灯二つかかげたるに東浜とするせり。神官のごときもの、ちいさき櫛を手にもつ。次に猿田彦の面きて装束し、馬上にてわたる。(後略)

ちょうど『摂津名所図会』に描かれている難波神社の蒲団太鼓と坐摩神社のだんじりについてふれています。

図7は、難波神社の蒲団太鼓です。蒲団太鼓は、現在も堺のほうにたくさん残っています。堺の蒲団太鼓は四角い木枠に布団らしきもので囲っていて、中に人が入るような形になっておりますが、図7を見ますとほんとに布団を重ねているように見えます。その下を4本の柱で支えて、その中で子供が4人で四方から太鼓をたたいておりますね。



図8：坐摩神社「夏祭車楽囃子」(『摂津名所図会』寛政10年〈1798〉刊)

叩き合いになりそうな感じですけど。子供は投げ頭巾をかぶっています。この投げ頭巾は白色のようですね。天神祭の催太鼓の願人がかぶるのは赤色ですが。図7の左下隅に、雁木、階段があって川になっておりますね。これは難波神社さんですので、西横堀川か、長堀川か、そのあたりの浜(川岸)を移動しております。商家では、幕を張り、提灯を吊し、屏風を立てておりますね。そしてスイカを振舞ったりしております。蒲団太鼓を舁いている人たちは、ほとんど裸、ふんどしに足袋はだしですね。蒲団太鼓の前方を見ていただいたら、今まで太鼓を叩いていた子供に傘をさしかけて、お母さんやおばさんが、「ようやった、ようやった」という感じで、子供を世話している様子がよくわかりますね。

それから、図8は車楽、だんじりなんですね。これは坐摩さんのだんじりです。図中に書いてありますように、東堀十二浜のだんじりですね。東横堀川です。十二浜というのは、上荷船・茶船という、大阪市中の堀川を使って物資を運ぶ運搬船が、杭場といまして、それぞれの浜で仲間をつくっていたのですね。人足さんたちがいて荷揚げをしたりする、そういうところですね。東横堀には12の浜があったということでしょうか。この図を見ますと、だんじりの下部、窮屈なところで太鼓やら鉦を鳴らして、上には三味線を持った人や、子供やたくさんの人が乗っていますね。前から2本の綱で引っ張って、だんじりの廻りの柵に何人も肩を入れています。商家の店の間を開け放ち、やはり幕を張って、傘を着た提灯を立てています。提灯には鷺の紋がついています。坐摩神社さんの社紋ですね。それから木戸がありまして、ここからこの町内へだんじりが突入してくるところです。やっぱり商家の軒先にずっと、防護柵をめぐらしております。現在、岸和田でもやっていますね。幕を張り、後ろに波に千鳥の屏風を立てています。その前に晴れ着をきて、御寮さんや嬢さんがすわってだんじりを見物しています。御寮さんが小さい子供を抱えています。それからやっぱりスイカを振舞って、お茶も出していますね。その木戸の内側には、やはりだんじりは暴走したりしますので怖いんでしょうね、お店の前に人が集まって、怖そうな顔をした女の人や、それから

二本差しの侍も一緒になって、見物しています。

ここで私は前から疑問に思っているのですが、図8でもだんじりの下の段で、前てこ、というんですが、てこ(プレーキ棒)を握って檄を飛ばしている人が描いてありますね。この人の服装ですが、ボタンがついているシャツを着ているように見えます。図7の蒲団太鼓の先頭にも同じような服装の人がいます。以前から服飾史の専門の方にお聞きしたいと思っていたのですが、この時代にこういうシャツはあったんでしょうか。それとも輸入ものなんでしょうか。他の人はみな、はだかであったり、肩廻りから腕と背中の上部だけのシャツ(船頭さんがよく着ている)姿ですけれども。この指揮官だけは立派なボタンつきのシャツを着ています。

4. 大坂三郷に住む大阪町人にとって

夏祭りとは

今回は、船場の3神社のうち、御霊さんの祭礼図を載せておりません。その代わりに、図9に天神祭の地車宮入の図を載せましたので、天神祭の地車(だんじり)について少し説明したいと思います。

地車曳行や宮入は、神様が御旅所へお渡りになる神輿渡御のようなお宮さんの行事ではなく、氏子さんたちがお祭りを慶び盛り上げる神賑行事、神賑わいの行事です。ですから、そのお祭りを盛り上げるために各町内が出したり、市場が出したりするものです。江戸時代、天神祭は6月24日が宵宮で、25日が本宮ですが、地車が出るのは24日の宵宮です。24日夕刻より行われる地車宮入が呼び物でした。そして、25日夕刻からは船渡御が斎行されます。現在、杭全神社で地車宮入が行われておりますが、江戸時代の天神祭の地車宮入も同じような形で行われ、もっと規模が大きいものでした。氏地内の各町内や天満青物市場、堂島米市場などの市場や仲間が競い合って地車を持つわけです。前もってくじを引いて、宮入する順番を決めておきます。江戸時代、一番多くの地車が宮入したのは安永9年(1780)で、くじを引いた本番地車が71台、続いて宮入する追附地車が13台、そのほかに無宿地車なども出ていますので、この年には100台近い地車が出たと考えられます。地車

は夕刻から夜に宮入をすると、本殿のうしろに並んで、一晩中地車囃子をにぎやかに奉納して、25日の朝からは、順次もとの町内へ帰っていきます。幕末から明治には、出る地車数も激減していき、明治29年になって、たった1台残っていた天満青物市場の地車が大阪天満宮へ奉納され、今にいたっています。この地車は三ツ屋根地車と呼ばれるちょっと変わった形をしています。

町内で地車を持つといいましたが、江戸時代の大阪三郷の中にある620もの町は、一つ一つが町内共同体と呼ぶべきものです。大阪三郷内の町は、本当に狭い範囲です。たとえば、道修町が一つの町内になるのではなく、道修町一丁目・二丁目・三丁目…とそれぞれが一つの町内であって、そこにちゃんと町会所があって、町内のことを全部管轄しているわけですね。町会所には水帳と呼ばれるその町の土地台帳があります。水帳には、町内の家屋の土地の広さが、表口何間、裏行何間何尺というふうを書いてありまして、その下にその家屋敷（土地と家）の所有者の名前が、何屋何兵衛と載っています。名前の下には黒印、ハンコが押されています。大阪の場合、土地と家の持ち主がバラバラということはめったにありません。土

地と家はくっついておりまして、地主さん即ち家主さんです。もし家屋敷の所有者が諸事情により家を売ってその町内から出て行きますと、水帳に書いてある名前の上に付け紙という、新しい所有者の名前を書いた紙を上端だけ糊付けして貼ります。そうすると、持ち主がどんどん入れ替わって、上へ上へと重ねて紙を貼っていても、付け紙ですから、ペラペラめくれば前の持ち主の名前がわかります。水帳には詳しい地図が附いていまして、町内の土地構成が一目瞭然です。水帳は、町会所と惣会所と大坂町奉行所に置いてあります。水帳は、江戸時代初期、明暦3年（1657）にはじめてつくりませんが、それからだいたい40、50年ごとに作り変えていきます。最後が安政3年（1856）の水帳です。その安政3年の水帳、まず、620町の町内の町会所にあります。総会所にも保管してあって、大坂町奉行所にもあります。ですから、膨大な数の水帳があったはずですが、船場や上町、島の内は、かなり残っているのですが、天満と現在の西区のあたりはもう全滅といっていいほど水帳は残っていません。

大阪の町に住んでいる人は大阪町人ですが、大阪三郷の町内に土地と家を持ち、そこに住み、水

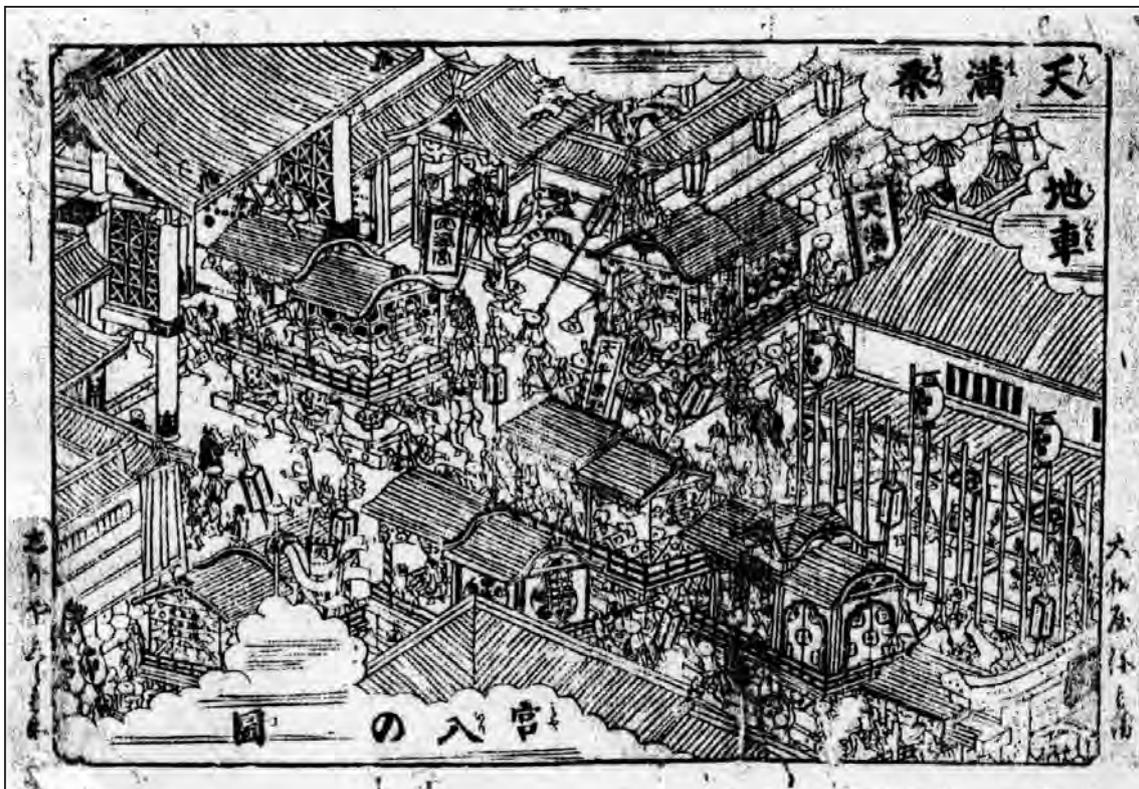


図9：「天満祭地車宮入の図」（大阪府中之島図書館蔵）

帳に名前が載ってはじめて、正式の大阪町人として認められるわけです。つまり広義の大阪町人と狭義の大阪町人があり、水帳に名前が載っている人が狭い意味での大阪町人です。水帳の名の由来については、御図帳から水帳になったのではないとも言われています。町の水帳に名前が載っている人が正式にその町の構成員として認められます。そうなりますと、その町の町年寄を選ぶ選挙権と選ばれる被選挙権を持ち、公役・町役という、いわゆる住民税を負担します。その町の一員として、分を守って、恥ずかしくない暮らしをしなければなりません。そういう風にして町内に暮らしますと、その町内はがっちりとかたまった町内共同体ですので、何をしても気を遣いながらしないといけないわけですね。お隣の家もお向かいの家もみんなわかっています。どういう暮らし向きで、どういう商売をしていて、何人子供がいて、丁稚さんや女衆おなごしさんが何人いて、など全部わかった世界です。道修町などでは、商売まで一緒になるわけですね。私ら主婦にとりましたら、こんなかなわん世界はないと思いますけど。家の中には他人の目がたくさんあって、一步外へ出ても皆が見ているという状態です。そういう中での年中行事のお祭りです。だから町あげてお祭りをしないといけないのです。そのときに、ちょっとケチなことしたりしたら、あそこは商売がうまくいっていないのではないかという噂がたちますし、派手なことをしますと、分不相応であると非難されます。それは、もう大変なことです。

船場独特の呼び名、女の子だったら、「なかちゃん」「こいちゃん」。男の子だったら、「おおぼんちゃん」「なかぼんちゃん」「こぼんちゃん」。こういう呼び方をすると、名前よりもその家の何番目の子かという、その子の立場がすぐわかるわけです。「〇〇家のこいちゃん」といえば、その家のお嬢ちゃん、ということです。そういう世界ですね。家の中でも外でも他人の目がいっぱいあるのですから、それはもう行儀の悪いことはできませんね。きちんと分を守ってきっちり生活していけないといけません。

そんな世界で、氏神さんのお祭りというのは、お正月について大切な行事です。同じ氏神さんの氏地の町々、何十町、あるいは、百を超える町々

が、全部一緒になって祝うお祭りです。

それから各家でいうと先祖の祭り、法事というのが非常に大事になってくるわけです。幕末にくにつれて、そのお家が何代も続きますと、初代からずっと続いて、法事ばかりしているような状態になってきます。冠婚葬祭でも結婚式などは一回ですみますが、もし当主が亡くなられたら、千日前の千日墓所まで行列を作って行くお葬式からはじまり、葬儀の後の仕上（しあげ）、初七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日、で四十九日ですね。それから、百か日があって、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十五回忌、三十三回忌、五十回忌、百回忌と、延々と続いていくわけです。それが当主夫妻であまり差がなく、御寮人さんのお葬式、法事もきちんとやっております。そういう風な法事だらけの暮らしになっていくわけですね。その法事のたびに親戚一統、商売仲間、町内の人々をお呼びして精進料理を出さないといけません。ですから各町々に仕出料理屋があります。それらの仕出料理屋は八百屋何々という名前が多いので、おそらくもともとは八百屋だったのでしょう。大阪の商家の法事では、仕出料理屋の料理人が天満の市場に行って材料を整えて、法事を行う家の台所に来て、その家の家宝のお道具や器に盛り付けして、お客さんにお出しする。料理は一人前くらいで請け負っているわけです。さらに法事は自分の家だけにはとどまりません。我が家の法事にお呼びした人に呼ばれて行くことも多いですから、幕末のころになると月のうち何日も法事の日（精進日と言っていたようです）が回ってきます。

他人の目がたくさんあって、非常にきっちりとしたルールで動いていて、そうした暮らしが何百年単位で続いてきて、大阪の生活文化が成立していくわけです。もちろん、先ほど水帳についてふれましたように、大坂三郷内の何処かの町内に家屋敷を所持して住んでいる狭義の大阪町人の栄枯盛衰ははげしく、町内の構成員は入れ替わりを繰り返したのですが、全体として見るとそういう暮らしぶりだったのです。それが戦前までは続いてきたわけです。船場の言葉もそうですね。そういう暮らしで培われてきた言葉で、商売人の言葉ですから、相手に気を悪くさせないように気を遣

い、人間関係がうまく行くようにユーモアのセンスに富み、非常に発達した言葉です。その船場言葉も滅んでしまったのが残念でございます。

江戸時代の大阪町人、狭い意味での大阪町人にとりまして、氏神さんのお祭りを盛大にしかも分相応にお祝いするということは、自分の立場、ステータスを守るといった意味があったのですね。

※商家の法事については、私の曾祖母の実家の史料を翻刻して出版しました『助松屋文書』（昭和53年刊）によりました。

近江晴子（大阪天満宮文化研究所 研究員）

奈良女子大学文学部卒業。昭和59年から大阪天満宮の歴史の編纂に従事。大阪天満宮の歴史と大阪の歴史を主な研究テーマとし、主要論文として「大阪天満宮の氏地の拡大と坐摩神社との相論」（『大阪天満宮史の研究』平成3年、思文閣出版）、「大阪天満宮の境内地・社地における旧大名家屋敷について」（『大阪天満宮史の研究』第2集、平成5年、思文閣出版）、「大阪天満宮の講について 一享保9年～慶応2年一」（『大阪の歴史』54号、平成11年）などがある。

大阪の夏祭り調査報告

内田吉哉

1. 大阪の夏祭り

最初に、「大阪の夏祭り調査報告」というタイトルについて説明いたします。関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターの祭礼遺産研究プロジェクトは、平成17年の6月末から8月初頭にかけて大阪の夏祭りの調査を行ないました。この調査は、大阪のブランドイメージをアピールしていくことを目的とした大阪ブランドコミッティという団体との提携に基づいて、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターが、「大阪夏祭りカレンダー」作成のための基礎的データの収集作業を行なったものです。

調査活動は、祭礼遺産研究プロジェクトのプロジェクトリーダーである黒田一充氏（関西大学文学部助教授）のもとで、関西大学の大学院生に調査員として協力していただきました。これらの調査内容について、撮影写真を紹介しながら報告していきたいと思います。

まず、大阪の夏祭りについて概要を説明いたします。表1の大阪の夏祭り一覧を見ると、はじまりが6月30日で終わりが8月1日となっています。この6月30日に行なわれる愛染祭から8月1日に行なわれる住吉祭までの約1か月間が大阪の夏祭りの期間とされています。大阪の夏祭りという愛染祭と住吉祭、それから天神祭が大変有名なのですが、実際にはこの表1を見るとよくわかるように、その他にもたくさん祭りがあります。そこで問題は、これらの祭りの中からどのお祭りをピックアップして調査するかということになります。全ての祭りを調査に行くことは物理的にも不可能ですので、まず第一に、特色のある祭りを優先して調査することにしました。第二に、地理的に遠い、交通の便の悪いところや、夜に催される祭りは、調査員である大学院生たちのスケジュール等の都合上から取材が難しいのでなるべく避けました。

祭りは夏祭りだけでなく、春夏秋冬と四季ごとに催されているわけですが、最初は春の祭りと秋祭りから始まったと考えられています。春と秋と

いうのは農業のうえで重要な時期であり、特に稲作に関連する祭りが行なわれます。春であれば田植えとともにその年の豊作を祝う、予祝の性格を持つ春祭りが行なわれます。秋であれば稲作の収穫を感謝するための秋祭りが行なわれます。春祭り・秋祭りの次に、冬の祭りがはじまったといわれています。冬の祭りというものは、農業が行われない農閑期の骨休めとして行われた祭りなので、芸能などの要素が含まれているのが特徴であるといわれています。

春夏秋冬の季節の祭りのなかで、最後にはじまったのが夏祭りであろうといわれています。夏に祭りを行う意味として、ひとつには夏は疫病や飢饉が発生する時期ですので、それらを防ぎたいという願いが込められています。平安時代から始まった御霊信仰にもとづいた、怨霊が災いを及ぼして疫病や飢饉を引き起こすという考えから、夏祭りを行なって怨霊を鎮めようとするのです。もうひとつ夏祭りの特徴として、祭礼の要素が含まれることがあげられます。民俗学においては祭りという言葉と祭礼という言葉とは区別して使われており、祭りというと普通にいわゆる「お祭り」のことを指しますが、祭礼というと、例えば御神輿やだんじりといった、見世物・パフォーマンス的な要素が含まれるものであるとされます。

大阪の夏祭りは表1にありますようにほぼ7月に行なわれています。これは旧暦6月の祭りを太陽暦に置き換えるとほぼこの期間になるということです。旧暦でいうと6月がちょうど真夏にあたりますので、旧暦6月、太陽暦では7月に行なう祭りが夏祭りということになります。

たくさんの祭りがありますが、これらは大きく4つの性格に分類できます。一つ目は先ほど述べたように、夏の疫病や飢饉の災いを祓う祭りです。二つ目は農村の祭りの要素が含まれた、農業に関連した祭りがあります。三つ目には、旧暦6月を新暦に換算するとその中に7月7日、七夕の日が含まれていますので、七夕に関連する行事がみられます。四つ目には、旧暦6月7日が修験道の開祖とされる役行者の命日という伝承がありますので、この日付を新暦に換算して7月7日、ちょうど七夕の時期に修験道の行事が行なわれます。大阪の夏

6月30日	愛染祭(天王寺区) 茨木神社輪くぐり神事(茨木市)	7月17日	感田神社(貝塚市) 瓢箪山稲荷神社(東大阪市) 高津宮夏祭(中央区) 日根神社ゆ祭(泉佐野市) 春日神社夏祭(泉佐野市) 伊居太神社例祭(池田市)
7月1日	愛染祭(天王寺区)	7月18日	瓢箪山稲荷神社(東大阪市) 高津宮夏祭(中央区) ございば、朱印 河堀稲生神社夏祭(天王寺区) 呉服神社例祭(池田市)
7月2日	愛染祭(天王寺区) 石切劔箭神社献牛祭(東大阪市)		
7月3日		7月19日	東高津宮例大祭夏祭(天王寺区) 野田恵比須神社(福島区) 河堀稲生神社夏季大祭(天王寺区)
7月4日		7月20日	東高津宮例大祭夏祭(天王寺区) 野田恵比須神社(福島区)
7月5日		7月21日	坐摩神社夏祭(中央区) 陶器祭 難波神社氷室祭(中央区) 氷柱の奉納 三光神社神祭(天王寺区) 寺方の提灯踊り(守口市)
7月6日	機物神社七夕祭(交野市)	7月22日	坐摩神社夏祭(中央区) 難波神社氷室祭(中央区) 三光神社神祭(天王寺区) 能勢妙見山虫弘会祈祷会(豊能郡能勢町) 寺方の提灯踊り(守口市)
7月7日	瀧安寺大護摩供修法(箕面市) 金剛山蓮華祭(千早赤阪村) 星田妙見山七夕祭(交野市) 機物神社七夕祭(交野市) 安倍晴明神社夏祭(阿倍野区) 大阪天満宮七夕祭(北区)		
7月8日	大津神社夏越祭(羽曳野市)	7月23日	坐摩神社夏祭(中央区) 科長神社夏祭(太子町) だんじり・神輿 星田妙見宮妙見祭(交野市)
7月9日	大森神社灯籠祭(熊取町)	7月24日	天神祭(北区) 茅の輪くぐり・鉾流神事 生根神社だいがく祭(西成区) 科長神社夏祭(太子町) 佐太天満宮夏祭(守口市)
7月10日		7月25日	生根神社だいがく祭(西成区) 天神祭(北区) 船渡御 紀部神宮例祭(池田市) 佐太天満宮夏祭(守口市) 渋川神社逆祭(八尾市)
7月11日	杭全神社夏祭(平野区) 生國魂神社夏祭(天王寺区) 豊太閤奉納	7月26日	渋川神社逆祭(八尾市) 安倍晴明神社夏祭(阿倍野区)
7月12日	杭全神社夏祭(平野区) 生國魂神社夏祭(天王寺区) 難波八坂神社夏祭(浪速区) 白鳥神社夏祭(羽曳野市)	7月27日	渋川神社逆祭(八尾市) 安倍晴明神社夏祭(阿倍野区)
7月13日	杭全神社夏祭(平野区) 難波八坂神社夏祭(浪速区) 堀越神社夏祭(天王寺区) 五社神社例祭(池田市) 細河神社例祭(池田市) 弁財天祭(交野市)	7月28日	興覚寺ほうろく灸祈祷(土用丑日)(堺市)
7月14日	杭全神社夏祭(平野区) 難波八坂神社夏祭(浪速区) 茨木神社夏祭(茨木市) 平野夏祭(平野区)	7月29日	
7月15日	玉造稲荷神社夏祭(中央区) 越瓜のふるまい 茨木神社夏祭(茨木市) 大江神社夏祭(天王寺区) 久保神社夏祭(天王寺区) 五條宮夏祭(天王寺区) お初天神夏祭(北区) 地車囃子 八坂神社例祭(池田市)	7月30日	住吉祭(住吉区) 茅の輪くぐり
7月16日	玉造稲荷神社夏祭(中央区) 感田神社(貝塚市) 太鼓台祭 日根神社ゆ祭(泉佐野市) 大江神社夏祭(天王寺区) 久保神社夏祭(天王寺区) 五條宮夏祭(天王寺区) お初天神夏祭(北区) 例大祭・宮入 門真神社例祭(門真市)	7月31日	住吉祭(住吉区) 道隆神社大祓祭(貝塚市)
		8月1日	住吉祭神輿渡御祭 宿院頓宮お祓い神事(堺市) 一岡神社祇園祭(泉南市)

表1: 大阪の夏祭り

祭りにはこれらの4つの性格を見ることができま
す。では写真を紹介しながら大阪の夏祭りの調査
報告をはじめます。

2. 調査報告

6月30日～7月2日 勝鬘院・愛染祭

まず、6月30日から7月2日にかけておこなわれ
る愛染祭です。写真1は四天王寺の別院である勝
鬘院の門前です。愛染祭はなんといっても宝恵駕
籠がこのお祭りの最大の特徴となっています(写
真2)。籠の中には愛染娘に選ばれた女性が乗っ
ています。この宝恵駕籠が高く担ぎあげられ、何度
もぐるぐる回転させられます。ここが愛染祭の最
大の見せ場ですが、駕籠を回すようになったのは
最近のことで、単に報道陣へのサービスである
ということです(写真3)。この愛染祭が大阪の夏祭
りの幕開けとされています。愛染祭は大阪で一番
早く行なわれる夏祭りですが、写真の愛染娘が浴
衣を着ていることからわかるように、大阪の夏
祭りのなかで一番早く浴衣を着る祭りとして、別
名、浴衣祭とも呼ばれています。



写真1：勝鬘院



写真2：愛染祭 宝恵駕籠

7月2日 石切劔箭神社・献牛祭

続いて7月2日には、東大阪市の石切劔箭神社で
献牛祭が行われます。写真4は境内の様子です。
献牛祭という名前の通り、牛が関連する祭り
です。お祭りの時には写真5のような、発泡スチ
ロール製の造り物の牛を引いてパレードをしま
す。パレードは神社から出て商店街を抜け、さら
に近鉄石切駅の東側に渡り、上之社という神社
へ向かいます。ただし、今年は調査に行った日
があいにく雨天であり、写真4を見ての通り、
牛にもビニールがかけられており、パレードは
見られませんでした。

献牛祭はその名のとおり、牛が関係する祭り
ですが、これは農村の祭礼の要素が入っている
ことができます。献牛祭が行なわれる7月2日
は旧暦でいうと6月の初頭にあたりますが、こ
の時期は半夏生の日にあたります。半夏生は、
大阪あたりではハゲと言うこともあり、この日
までに田植えを終わらせなければならない日と
されています。半夏生の日までに田植えを終わ
らせ、半夏生の日には農作業を休み、田植え
で大いに働いてももらった牛にも休んでもら
うということです。そういうわけで、半夏生の
日に催されるこの献牛祭は、牛をパレードさ
せるという行事が行なわれています。昔は本
物の牛を飾り立ててパレードし



写真3：愛染祭 宝恵駕籠



写真4：石切劔箭神社



写真6：機物神社



写真5：造り物の牛

ていたのですが、牛が観客に驚いて暴れたりするので、今のような造り物の牛をパレードさせる形式になったそうです。

7月7日 機物神社・七夕祭

7月7日は七夕の時期にあたりますので、七夕の祭りがいくつかおこなわれます。交野市に機物神社という神社があり、写真6は機物神社の境内の様子です。それぞれ家庭で七夕飾りを作り、それを神社に持ち寄って境内に立てて、七夕祭りをを行います（写真7）。その他に、境内でも七夕の短冊を販売しており、その場で短冊を買って飾ることもできます。

この交野市というところは、昔から七夕信仰が強く残っており、七夕にちなむ信仰や説話がいろいろと伝わっている土地です。地名にも「天の川」という名前の川があるほどで、機物神社も七夕の祭りを盛大にやっています。

機物神社は、もとはこの地にはじめて機織りの技術を伝えた漢人庄員を祭神としていましたが、平安時代になると京都から貴顕が遊狩のために交



写真7：機物神社 境内



写真8：機物神社 境内

野を訪れ、当時盛んだった天体崇拜思想や文学的趣味から転じて七夕信仰に結びついたとされています。また他に、陰陽道の影響が機物神社の祭神を七夕神にしたとする説もあります。

七夕の祭りとおわせて、茅の輪くぐりも行なっています（写真8）。これは夏の疫病を祓うために、境内に茅で編んだ輪が設置され、これをくぐることによって夏の災いを祓うことができるとされています。7月6日が宵宮で、7月7日の本宮では神輿が出て神事があり、短冊のお祓いと祈願をおこなって、夜中に笹を天の川に流します。

7月7日 星田妙見宮・七夕祭

同じく交野市に星田妙見宮という神社があり、ここも機物神社と同じく七夕祭を行なっています(写真9)。星田妙見宮は正式名を小松神社といますが、これは明治時代の神仏分離令以降の名称です。写真10のように、星田妙見宮の七夕祭では、本殿の中に七夕飾りがたくさん飾られています。妙見というのはつまり北斗七星ですので、星田妙見宮は写真11のように、幕に北斗七星がかたどられています。機物神社と同じく境内にも七夕飾りが飾られ、茅の輪も設けられています。七夕祭り



写真9：星田妙見宮



写真10：星田妙見宮 本殿の七夕飾り



写真11：星田妙見宮 本殿

の性格を持つ祭礼の2例目として紹介しました。

7月7日 瀧安寺・採燈大護摩供

先述したように旧暦6月7日、新暦では7月7日頃がちょうど役行者の命日となっています。そこでこの時期には修験道の要素が含まれた夏祭りも行なわれます。箕面市にある瀧安寺で行われている採燈大護摩供を紹介します。写真12の場面は法弓の儀といい、矢をつがえて、東西南北と中央と鬼門とで合計6つの方向に高く矢を放ち、結界を張る作法を行ないます。



写真12：瀧安寺 法弓の儀



写真13：瀧安寺 斧の作法



写真14：瀧安寺 護摩の儀礼

次に、斧の作法を行ないます（写真13）。これは斧でお祓いをする作法で、山の神様に対して行われる作法であるといわれています。そして、採燈大護摩供の最も重要な儀礼である護摩の儀礼が行なわれます（写真14）。木を井桁に組んで護摩を焚きます。箕面の瀧安寺の採燈大護摩供では、護摩壇を覆うヒバは高山という集落が昔から奉納しています。採燈大護摩供が終わったあと、高山地区の代表者は護摩壇の灰を持ち帰って集落の人に分けるといことが行なわれています。

7月7日 転法輪寺、葛木神社・蓮華祭

同じく修験道に関連する事例をもうひとつ紹介します。千早赤阪村にある転法輪寺という寺院と葛木神社という神社で行なわれている蓮華祭です。大阪在住の方には千早赤阪村の金剛山という呼びかたの方が通りが良いかもしれません。祭の内容は、まず葛木神社で神職が例祭を執り行ないます（写真15）。そして、葛木神社の例祭が終わった頃に、転法輪寺から山伏がやってきます（写真16）。山伏は葛木神社で法楽をささげ般若心経を唱えた後、転法輪寺へ戻って儀礼をおこないます。写真17は大法弓の儀といい、弓矢で结界をはる儀式を行うものです。その後、瀧安寺の採燈大護摩供と同じように護摩を焚きますが（写真18）、蓮華祭では護摩供のあとで火渡りの儀式が行われます（写真19）。先ほど護摩を焚いた、その火が燃えつきた後で、その上を山伏や信者の方が歩いてわたります。



写真16：蓮華祭 葛木神社へ山伏が来る



写真17：蓮華祭 転法輪寺 大法弓の儀



写真18：蓮華祭 転法輪寺 護摩



写真15：蓮華祭 葛木神社例祭



写真19：蓮華祭 転法輪寺 火渡りの儀式

7月11日、12日 生國魂神社・いくたま夏祭

7月11日から12日にかけて生國魂神社で行われています、いくたま夏祭です。生國魂神社は現在でも大変氏子区域が広く、ある氏子地域からは獅子舞が出てきます（写真20）。また別の地域からは神輿が出されます（写真21）。また別の地域からは枕太鼓が出されます（写真22）。氏子区域が大変広いので、それぞれ氏子区域ごとに、出し物が枕太鼓、神輿、獅子舞というふうに分かれています。

写真23もいくたま夏祭りの風景ですが、子供が頬や胸に朱印を押しています。朱印を押す意味については、今後の調査研究を待たねばなりません。大阪の夏祭りの中で他にも似た事例がいくつかみられます。

7月11日～14日 杭全神社・平野郷の夏祭

いくたま夏祭とほぼ同じ時期、7月11日から14日にかけて平野郷の夏祭が行なわれます。この祭りはだんじりが大変有名です。写真24、写真25が平野郷の夏祭のだんじりです。平野区には杭全神社という神社があり、だんじりは夜になると杭全神社に宮入を行います。このときの様子は、各だんじりが先を争って宮入を競い、大変激しい状況で、けんか祭という別名もあるほどです。今回は調査をおこなった大学院生が女性ということもあり、見学に行くうえで少し危ないかなという心配もありましたので、実際に宮入の場面を調査するのは遠慮させていただきました。

この平野郷の夏祭で、もっとも特徴的なのは杭全神社から出発した神輿が寺院に立ち寄るという点です。杭全神社から出た神輿が、長宝寺という寺院と、全興寺という寺院と、二つの寺院をまわります（写真26）。写真27は、神輿が長宝寺の中に入った様子です。長宝寺に神輿が来まして、



写真20：いくたま夏祭 獅子舞

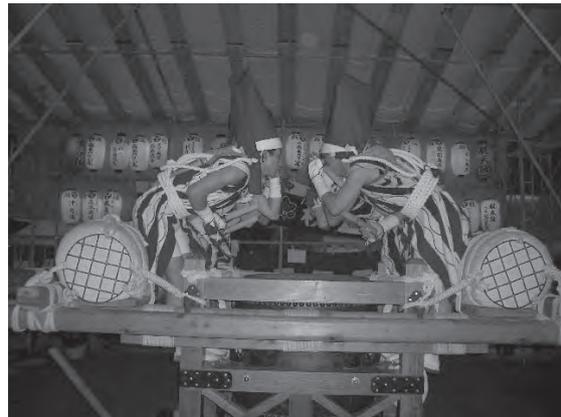


写真22：いくたま夏祭 枕太鼓



写真21：いくたま夏祭 神輿



写真23：いくたま夏祭 朱印

写真27では神職さんが神輿を拝んでいます。その後ろに僧侶も写っています。神様が乗っている神輿を僧侶が拝むという、神仏習合の名残がみられる点が大変特徴的なのですが、今回の調査ではシャッターチャンスを逃してしまいまして、僧侶が神輿を拝んでいるシーンを撮り損ねてしまいました。

7月18日 高津宮・夏祭

写真28は、日本橋付近にある高津宮の夏祭です。文楽や歌舞伎などで有名な「夏祭浪華鑑の殺し」の場面は、この高津宮の境内が舞台だとされています。さて、この高津宮の夏祭ですが、特徴のひとつとして、「ごさいば」、植物学の和名としてはアカメガシワというのが正しいようですが、境内

に生えておりますごさいばを神饌として神前にお供えするというのがあげられます（写真29）。

写真30は高津宮夏祭の神輿です。神輿は黒門市場の地区（地下鉄日本橋駅付近）と桃園地区（谷町六丁目付近）の二か所から出ます。黒門地域の神輿は「黒門みこし」桃園地区の神輿は「鳳みこし」と呼ばれています。写真31ですが、先ほどのいくたま夏祭と同じように、朱印を押しています。写真31では、子供が額に朱印を押してもらっていますが、昔は胸の真ん中に一か所押すのがしきたりだったといわれています。今は顔でも腕でもあらゆるところで、要望に応じて朱印を押してもらえるということになっています。

写真32ですが、高津宮の夏祭では、獅子頭のついた笹を縁起物として授与しています。



写真24：平野郷の夏祭 だんじり



写真26：平野郷の夏祭 長宝寺門前



写真25：平野郷の夏祭 だんじり



写真27：平野郷の夏祭 長宝寺



写真28：高津宮 境内



写真29：高津宮夏祭 ごさいば



写真30：高津宮夏祭 神輿



写真31：高津宮夏祭 朱印

7月15日、16日 玉造稲荷神社・夏祭

7月15日、16日に行われます、玉造稲荷神社の夏祭です。この玉造稲荷神社というのは、なにわ伝統野菜のひとつである越瓜で有名で、写真33のように境内に案内が掲示されており、玉造黒門越瓜という名前で写真34のように境内の中で栽培しています。夏祭のときには写真35にみられますように、越瓜をふるまって食べさせていただけるということになっています。

7月21日 坐摩神社・夏季大祭

7月21日に行われています、坐摩神社の夏季大祭です。坐摩神社は正しくは「いかすり神社」と読むそうですが、一般に「ごま神社」と呼ばれて広く親しまれています。

写真36では境内にのぼりが立っています。7月21日の夏季大祭のときに瀬戸物市が行なわれているのですが、これは坐摩神社の境内の中に陶器神社という末社があり、その祭りとして陶器祭が行なわれ、これにあわせて開かれている瀬戸物市です。陶器神社に関連した祭りですので、写真37のような陶器人形―菊人形の陶器版というようなものですが―を作って展示するという催しがおこなわれています。



写真32：高津宮夏祭 縁起物の筐

これらの陶器人形は、5～6年くらい前までは、毎年毎年その年の話題にあわせて趣向を凝らした人形を作っていたのですが、現在では毎年同じ写真37の人形が出るという風になってきています。今でも、坐摩神社の近所のとあるビルには、かつて作られた造り物の陶器人形が残されています（写真38）。

今回は写真を紹介できませんが、例えば数年前ですとNHK大河ドラマの『秀吉』にちなんで、北野の茶会の造り物の人形を展示するなど、その年ごとに趣向を凝らしていました。



写真36：坐摩神社

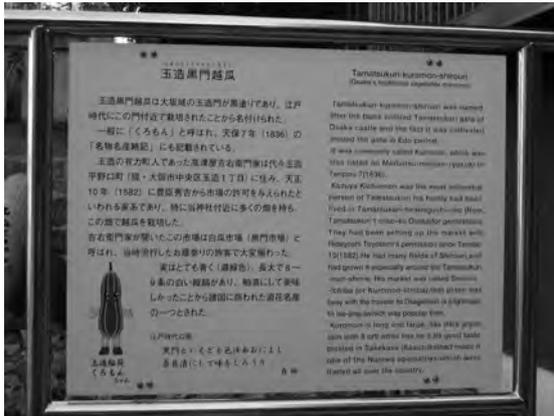


写真33：玉造稲荷神社



写真37：陶器人形



写真34：玉造稲荷神社 玉造黒門越瓜



写真38：陶器人形



写真35：玉造稲荷神社 越瓜のふるまい



写真39：難波神社



写真40：難波神社氷室祭 氷柱の奉納



写真41：難波神社氷室祭 かわり氷の授与

7月21日、22日 難波神社・氷室祭

7月21日、22日に、大阪市中央区にある難波神社で行われる氷室祭です。写真39は境内の様子です。氷室祭という名前のとおり、この祭では毎年、氷柱が献納されることになっています（写真40）。氷室祭のときには、かわり氷を一般参詣者の方に授与するというもおこなわれています（写真41）。このかわり氷を食べることによって夏ばてせずに健康に過ごせるといわれています。なぜかわり氷を授与するかという由来については、「かわり」が「勝ち」に通じるので夏に勝つという意味が含まれているといわれています。また、仁徳天皇の時代に天皇の兄、額田大彥皇子が、夏の狩の途中で野原に氷を貯蔵する氷室を発見し、その氷を天皇に献上しておおいに喜ばれたという故事によるともいわれています。

7月24日、25日 大阪天満宮・天神祭

写真42は、7月24日、25日に行なわれる大変有名な天神祭の、鉦流し神事の様子です。今年から神事を行う斎場がきれいに整備されまして、われわれ調査に行く者としても大変ありがたいことになっています。写真43は鉦流し神事のクライマックス、鉦流しの場面です。神職の方が鉦を流します。この中には人形が入っております。鉦流し神事が終わりますと、参加者は順次、鳥居にかけられた茅の輪をくぐって災厄を祓ってもらいながら、大阪天満宮の方へ戻っていきます（写真44）。

天神祭の時期には、天満宮の境内に御迎人形が飾られておりますので、写真を撮らせていただきました。御迎人形は、本来は御迎船に据付けられていたものですが、今は境内の中に飾るだけとなっています。写真45は鬼若丸、つまり弁慶の幼少時代の人形です。2005年NHK大河ドラマの『義経』に話題を合わせて展示する人形を選んだのだと聞きました。写真46は八幡太郎義家、つまり源義家です。これも大河ドラマに合わせて、源氏つながりということで展示しているという説明を聞きました。

お迎え人形のほかに、写真47のようなシジミの貝殻で作った藤棚が飾られています。夏の暑い時期に藤棚というのは季節外れですけれども、造り物というのは、あえて季節外れなところに、工夫

して藤棚を作り出すという趣向に面白味があるものだそうです。

同じように造り物として、乾物で作られた「猩猩舞」が展示されております(写真48)。高さ2メートルくらいある大きな人形です。材料は乾物でそろえており、袴の部分は昆布だそうです。上着の部分は同じく昆布ですが、表面を薄く削ってとろろ昆布のように白くしたものを用いています。飾りの部分は干しシイタケを使うなど、すべて乾物で作られています。これを作られたのは天満天

神御伽衆というボランティアの方たちで、江戸時代の文献を頼りにして制作されたそうです。その文献は、『造物趣向種二種』という造り物のアイデア集の本なのですが、造り物の材料と完成図は示されているものの、どのように組み立てるかという制作方法までは記されていないので、実際に制作するとなると大変な苦勞があったと聞きました。例えば「乾物の猩猩舞」の袴を昆布で作るにしても、袴を縫い合わせるにはいったいどうすれば良いのかなどの苦勞があったそうです。



写真42：天神祭 銚流神事



写真43：天神祭 銚流神事



写真44：天神祭 茅の輪



写真45：御迎人形 鬼若丸



写真46：御迎人形 八幡太郎義家



写真47：造り物 シジミの藤棚



写真48：造り物 乾物の猩猩舞



写真49：玉出だいがく夏祭 だいがく



写真50：玉出だいがく夏祭 だいがく

7月24日、25日 生根神社・玉出だいがく夏祭

天神祭と同じく7月24日、25日に行なわれている、大阪市西成区生根神社の玉出だいがく夏祭です。写真49にあります、提灯がたくさんぶら下がっているのが、だいがくです。かつてはもっとたくさんありましたが、戦争で焼けてしまっただけ残っていないそうです。本来はこれを担いで町内を練り歩くのですが、見ての通り大変背の高いものですので、今では電線にひっかかって歩きづらいということで、このように飾っておくだけになっています。写真50も同じくだいがくの写真です。小さいだいがくが一つありますが、これは子供用のだいがくです。

現在、だいがくの提灯は合計78個吊るされていますが、もともとは提灯が66個吊るされていたとされています。66個という提灯の数は、攝津国、河内国などという昔の国別でいうと、日本全国66

州に分かれているということから66個の提灯を吊るしていたといわれています。

写真51は明治時代の絵ですが、本来はこの絵にあるように、だいがくは大勢で担いで町内を練り歩いて威勢をあげるというものだそうです。

7月30日～8月31日 住吉大社・住吉祭

大阪の夏祭りは「愛染さんから住吉さんまで」といわれますが、その最後の住吉祭です。住吉祭も今まで紹介してきた事例と同じく、茅の輪をくぐって災厄を祓うという儀礼がおこなわれます。写真52は人形の入った箱をかついで茅の輪をくぐる場面です。写真53も同じく、大きな茅の輪が門に沿って設けられています。さて、住吉祭は7月30日から8月1日にかけて行なわれますが、8月1日は住吉大社から堺市の宿院にある頓宮というお宮まで神輿の渡御が行われ、これをもって大阪の夏

祭りが幕を閉じるということになっています。昨年までは比較的小さな神輿（写真54）と、船の形をした台車に乗せて曳く神輿（写真55）、この2つが住吉祭に出る神輿だったのですが、今年は45年ぶりに復活させたという、神輿渡御がおこなわれました（写真56）。今まで交通の事情などからこのような大きな神輿を担いで堺まで渡御するのは難しいということで昭和35年を最後に廃止されたままだったのですが、復活を望む声が多く、今年は45年ぶりに復活したとのこと。写真57は同じく神輿を担いでいる様子です。写真57などを見ますと、たしかにこの大きな神輿を担いで練り歩くのは昨今の交通事情では苦しいだろうなという感じがいたします。

最後に、写真58は住吉大社の鳥居ですが、鳥居をくぐったその先に神輿がいます。写真58で見ますと、鳥居をくぐって境内を出て行き、左折した方向が堺市です。神輿は住吉大社の境内を出て、無事に堺市宿院の頓宮に渡御し、大阪の夏祭りが幕を閉じるということになっています。



写真53：住吉祭 茅の輪



写真54：住吉祭 神輿



写真51：玉出だいがく夏祭



写真55：住吉祭 神輿



写真52：住吉祭 茅の輪くぐり



写真56：住吉祭 神輿



写真57：住吉祭 神輿



写真58：堺市宿院の頓宮へ渡御

内田吉哉（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターRA）
祭礼遺産研究プロジェクト所属。関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程在籍。主な研究テーマは、太子伝や聖徳太子絵伝など、聖徳太子信仰の文化史。

以上の大阪の夏祭り調査を、黒田一充助教授の指揮のもとに、大学院生に調査員として協力していただいて実施しました。その調査によって得られた基礎的データを元に「大阪の夏祭りカレンダー」制作に役立てることを考えておりました。まずは関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターが発行していますニュースレター『難波潟』第1号に特集記事としてカレンダーを掲載いたしました。以上、なにわ大阪文化遺産学研究センターの祭礼遺産研究プロジェクトが2005年7月におこないました大阪の夏祭り調査の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

編集後記

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターOccasional Paper」No.1をお届けいたします。No.1は、2005年9月24日に関西大学尚文館にておこなわれた第1回NOCHSレクチャーシリーズの特集号となっています。

第1回NOCHSレクチャーシリーズでは、「なにわ・大阪の神社」と題して、明治安田生命・関西を考える会の真野修三氏と、大阪天満宮文化研究所の近江晴子氏にそれぞれ講演をしていただき、あわせて本センターの祭礼遺産研究プロジェクトの調査成果を報告させていただきました。

真野氏の講演は、普段私たちが大学でおこなう研究とは異なる視点・スタンスからのお話であり、文化遺産学のこれからの方向性を考えるうえで大変新鮮で興味深いものでした。また近江氏の講演は、豊かな学識に裏打ちされたお話もさることながら、ご自身が生粋の大阪人でもある近江氏が話される柔らかい船場言葉が実に魅力的で、この語り言葉のニュアンスを紙面では十分にお伝えできないことを残念に思います。

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターOccasional Paper」No.1の刊行にあたっては、余裕のないあわただしいスケジュールのなか、原稿の校正などに快く応じていただき、また経験の浅い編集委員にいろいろとご教示いただいた真野氏と近江氏に深くお礼を申し上げます。

本センター祭礼遺産研究プロジェクトの調査報告に関しましては、プロジェクトリーダーの黒田一充助教授にご指導いただきました。調査活動に協力していただいた大学院生の方がたにも、この場を借りてお礼申し上げます。

このNo.1をふくめ、以降発行される「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターOccasional Paper」の表紙には、それぞれ各号のテーマに沿った写真や絵をデザインすることになっています。「なにわ・大阪の神社」をテーマとする本号の表紙は、毎年7月24日におこなわれる天神祭の鉾流神事の写真を、水彩画風にアレンジして掲載しました。

(編集委員 内田吉哉)

Kansai University Research Center for

Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies Occasional PaperNo.1

NOCHSレクチャーシリーズ **なにわ・大阪の神社**

発行日 2005年12月31日

編集・発行 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06(6368)0095 FAX 06(6388)9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/musium/naniwa/home.htm>

E-mail naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

印刷所 (株)廣濟堂
